赤眼の狼

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤眼の狼

【Ｎコード】
Ｎ６２８０Ｘ

【作者名】
如月　晃

【あらすじ】
ヘクセと呼称される吸血鬼。
その有り得ない存在を狩る為に結成された自衛隊少数精鋭の特殊部隊「ＨＡＷＫ」。
親がいなく、幼い時から自衛隊の訓練を受けた「赤眼の狼」と称される少年「直江幸成」と「ＨＡＷＫ」隊員はあるヘクセを追って「華景市」に潜入する。

幸成が潜入を命じられた場所は高校であった……

幸成を取り巻く隊員や高校生達による青春学園ダークファンタジー

序章：開幕

月夜の中の街。
街灯は無い。
その闇を照らすは月明かり。
雲一つ無い満月が照らす夜闇。
満月は青白く輝き、美しい。
昼とは違う澄んだ空気。
澄んだ空気は夜という物を形作る一つの事象であった。
その空気が不意に掻き乱されて風となる。
地面を叩く靴の渇いた音とそれに連なる呼吸の乱れた音が「静かな夜」という体系を崩していく。
その夜の中を転びそうになりながら脱兎の如く走っていく若い女性がいた。
その後ろからは不規則で粘着室な吐息が聞こえてくる。
獲物を追い詰める猟犬のようにつかず離れずの距離で嬲るように迫るのは男だ。
若い女性の後ろには中年で肉付きのいい中年男性が迫って来ていた。
中年の男は太っている割には足が速く、女性に張り付く様は無気味だ。
女性は助けを求めて悲鳴をあげるが、聞こえているのか聞こえていないのか、誰も家の中から出て来ない。
日本人は事件に遭遇しないように極力厄介事から遠ざかろうとする。
他人の不幸よりも自らの身の安全だけを考えて……
月夜の光で影が伸び、既に女性の影は男に踏まれていた。
既に捕まったも同然の状態で、いつでも捕まえられるのだと物語っている。
女性は月明かりの中を逃れるように大きな廃工場の中に飛び込んだ。
光よりも闇を……

闇を求めた女性は鉄の扉を慌てて開け、閂錠(かんぬき)を掛ける。
女性は広い空間の中、後退りをすると扉を凝視した。
数秒の沈黙の後に体をぶつける音が扉の向こうから聞こえてくる。
女性は尻餅を付くと、壁まで這う。
「誰か！誰か助けてぇ！！」
その悲鳴は虚しく廃工場の広い空間に谺(こだま)した。
元は何かの生産工場であっただろうが、今はそのような機械は無く、ひどく殺風景だ。
鉄の扉が軋む音と凄まじい轟音。
「もうすぐ僕の血肉になるんだよ？もっと喜んでよ、デュフフフ」
男の下劣な声が轟音に混じって聞こえてくる。
声音は下品で無気味、混じる息切れが澄んだ空気に絡み付く。
「誰かぁ！！」
女性の悲鳴が響いた瞬間、扉が勢いよく開き、月明かりに照らされながら男が現れた。
男は口元を涎で濡らし、口元が異様に光っていた。
舌なめずりをする度に涎が口元を濡らして、月明かりで糸が引いているのが良く見える。
男は女性に歩み寄ると膝に手を当てて、先程擦りむいたであろう傷から流れ出た血を舐め取った。
「美味い血だぁ……デュフフフフフ」
男は下卑た笑いを浮かべて女性を抱き抱え、その鋭い歯を首筋に突き立てようと口を開いた……
「イヤァアアッ！！誰かぁ！助けてぇ！！」
女性の絶叫が轟いたその時、男の腕から血が飛び散った。
男は思わず女性を取り落とすと、辺りを見渡し、怒鳴り散らす。
「誰だ！！何者だ！？」
「ヘクセ、ブラッド・ラスター。貴様を排除する」
廃工場の天窓から一人の少年が飛び降りてきた。
両手には先程、男の腕を撃ったであろう二丁拳銃が月明かりで光っ

ている。
右手にはスライド部分が黒い拳銃と左手にはスライド部分が白い拳銃が握られていた。
特異なのはその拳銃の銃口が二つ付いている事だ。
狩猟用の上下二連ショットガンの拳銃版のようなところか？
黒い軽装の防弾チョッキは非常に動き易そうだ。
右目には青く光るヘッドアップディスプレイ（ＨＵＤ）が光っていた。
その格好は特殊部隊を彷彿とさせる。
しかし、闇夜で光るのは右目のＨＵＤだけではなかった。
紅い左目。
月夜に照らされて顔は判然としないが、その光りを受ける左目の瞳は紅く光っている。
悪魔や化け物と形容するに相応しいその瞳は真っ直ぐと男を見つめていた。
「逃げて下さい」
少年は女性を僅かに一瞥しながら言い放ち、紅く光る瞳で扉に行くように促す。
女性は涙を流し、這いながら廃工場から逃げて行く。
男は女性を追い掛けようとしたがその間に少年が割り込み、銃を交差させつつ、引き金を引いた。
銃のスライド音だけが響き渡り、銃の発射と同時に発生する発砲炎「マズルフラッシュ」も、銃声も、弾丸が音速に達する時の音「ソニックブーム」も無い。
男の体から血が噴き出し、次々に放たれる弾丸が男を吹き飛ばした。
少年は素早く銃の弾倉を交換する。
刹那、吹き飛ばされた男が人間では有り得ない跳躍力で飛び掛かってきた。
少年は素早い身のこなしでそれを避けたが男の目的は少年ではなく、女性だった。

逃げる女性に飛び掛かろうとしたその時、少年はワイヤーが巻き付けられた拳銃を構えて引き金を引く。
射出されたワイヤーの先端には銛のように尖ったフックがあり、ワイヤーはワイヤー同士、摩擦で擦れ合う音を鳴らし、男の足に絡まった。
「逃がすか！！」
少年はワイヤー付きの拳銃を引っ張ると男は女性に指一本届かず、後ろに引っ張られた。
凄まじい轟音とともに床が陥没し、コンクリートの破片が宙を舞う。
少年はワイヤーを巻き取ると再び煙の中に銃口を向ける。
（こちらスカイアイ、被害者の保護を完了。心置きなくやっちゃっていいぜぇ、狼さん！）
「ロメオ、了解した」
少年はヘッドセットから流れた無線に吹き込む。
刹那、男は土煙から飛び出し、少年に飛び掛かってきた。
咄嗟の事に反応出来なかった少年は男のタックルをまともに喰らい、宙を舞う。
同時に男は壁を蹴り、宙を舞っている少年まで跳び上がり、腹部に一撃を叩き込んだ。
凄まじい速度で落ちていった少年の体は地面に落下し、男同様に地面を陥没させた。
男は地面に降り立つと身動き一つしない少年に歩み寄る。
舌なめずりしながら歩み寄る様は先程の女性に対してのような下劣さは無いものの、やはり無気味だ。
男が少年を掴みあげようとしたその時、少年は目を開けて笑みを見せながら二丁拳銃を構えた。
「Ｓｐｒａｙ　ｗｉｔｈ　ｍａｃｈｉｎｅ　ｇｕｎ　ｆｉｒｅ！！
（機銃掃射だぜ！！）」
二丁拳銃の上下二連装の銃口から同時に四発の弾丸が、フルオート射撃で次々と男に吐き出されていく。

近距離で使われて拳銃は初めて真価を発揮する。
それを理解しているからこその不意打ちは非常に効果的だ。
拳銃弾で弾き飛ばされた男は穴だらけながらも生きていた。
拳銃弾を受けて生きている例は珍しく無いが、その多量の穴で生きていられるのは有り得ない。
少年は体を腹筋の反動で跳ね上げ、起き上がると同時に男も起き上がる。
拳銃で開けられた穴は塞がり、男は再び舌なめずりする。
「いい加減にくたばれよ、吸血鬼」
少年は舌打ちをしつつ、二丁拳銃の弾倉を交換した後、ホルスターに二丁拳銃を仕舞い、腰に差していた刃渡り３０ｃｍのナイフを鞘から引き抜いた。
少年はナイフを構えると左手で柄を逆手に持ち、柄の底に右手を沿え、切っ先を男に向ける。
月が雲の影に隠れ、周囲を消し去った。
紅い瞳がＨＵＤの明かりに照らされて明るく光る。
数秒して雲の中から月が現れて周囲を照らし出した。
同時に二人は駆け出し、重く鈍い音が響き渡る。
月の明かりに照らされた二人の影は重なり合いながら静止していた。
男の胸にはナイフの切っ先が刺さり、鮮やかな血を滴らせている。
二人の動きは止まったように動かない。
不意にナイフから青白い電光が男の体に流れ、肉が焦げた匂いが漂う。
数秒の後に電光は消えて、少年はナイフを引き抜き、男を蹴り倒した。
男は痙攣しながら地面に倒れ、地面を血で濡らす。
紅い絨毯は鉄臭い匂いを発しながら瞬く間に広がり、水溜まりを作った。
「こちらロメオ。任務完了だ。抹殺対象のヘクセは殺害した」
（了解。あ～あ、眠う……とっとと帰って来いよ？）

「分かってるよ」
少年は先程とは打って変わって柔らかな笑みを漏らすとＨＵＤとヘッドセットが一体になった装置に手を当てつつ入口に歩いて行く。
その時、男が拳を振り上げ少年に殴り掛かろうとする……
が、それより早く少年は二丁拳銃を構えながら振り返った。
「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ！！（大当り！！）」
吐き出された四発の弾丸は男の眉間を撃ち貫き、男を吹き飛ばす。
同時に男の体は溶けていき、コンクリートに溶け込んでいった……

1－1：潜入調査（前書き）

第1話

１－１：潜入調査

吸血鬼……
誰もが一度は聞いた事はある単語だろう。
生命の根源と言われている血を吸う存在だ。
血を吸う存在などと笑う人もいるだろうが、実際、生物学的に利に適っている。
血液は高栄養の液体であり、ノミやシラミ、蚊等が良い例だろう。
その血を吸う人間は「ヘクセ」と呼称されている。
勿論、存在は極秘で知っているのは政府高官と一部の優秀な自衛官だけだ。
大々的に公表すればという意見も有るだろうがヘクセの特徴がそれを困難にしている。
一つ、ヘクセは人間と同じ姿で、目視で見分けが付かない。
結果、人々は疑心暗鬼に陥り、暴動に陥る可能性が出て来る。
一つ、ヘクセは特殊な能力や並外れた運動能力を持っている。
ヘクセはその通り、特殊能力、つまりは超自然的な力を操る事が出来たり、人間離れした身体能力を持っている。
前述の理由も加えると最悪の事態に陥ってしまう。
また、血を吸うという事はつまり、人間を必然的に襲うという事だ。
さらに民間に伝えられないという事実を考慮した場合、被害者は何が何だか分からない内に捕食・吸血されるという事になる。
被害者は行方不明にするにしても、あまりに多過ぎる被害者に政府は特殊部隊を設立した。
「Ｈｅｘｅ　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　Ｗｅａｐｏｎｓ　ａｎｄ　Ｋｉｌｌｅｒｓ」、通称「ＨＡＷＫ」は少数精鋭の特殊部隊だ。
階級は問わず、若く優秀な自衛官達を集めて設立されたＨＡＷＫは言ってしまえば不正規部隊だ。
自衛隊の英才教育を施した親がいない子供や天才的な自衛官だけを

集めたこの部隊には徽章を六つも持った化け物じみた自衛官さえいる始末。
どこの厨二病設定かと思うがそんな人物がいるのなら仕方ない。
そしてＨＡＷＫは、いや全世界の警察官や特殊部隊はある男を追っていた。
カズィクル・ベイ・ツェペシュ。
彼は謎が多いが、大胆でヘクセ史上主義を掲げる秘密結社「シュトレイゴイカバール」を率いている。
シュトレイゴイカバールは言ってしまえばテロ組織だ。
人間は勿論、同胞のヘクセですら殺す集団であり、世界から極秘に狙われている。
様々な名前で呼ばれ、報道されている殆どのテロ組織がシュトレイゴイカバールなのだ。
そんな組織がある市に潜伏したとの情報を手に入れたＨＡＷＫは政府の特命を受けて、その市に潜入調査を開始した……

華景市。
８００００人にも満たない人口の小さな市で４３０平方キロの面積のこの市に到着した一台の白いワゴン車。
「はい、御一行様、到着でございま～す」
口周りに無精髭を蓄え、体格はがっちりし、糸目の男性は柄にも無い声で運転席から出て来る。
１８１ｃｍの巨体に厳つい印象に、始めてみた人は熊を連想するだろうその人物はノリノリで小さな荘、つまり、木造のアパートをツアーガイドのように紹介していた。
今年３４歳の直江三村（なおえみつむら）三等陸佐、それにしてもこの男、ノリノリで

ある。
「おっちゃん、何かキモいわ」
金髪のセミロングを後ろで結び、青い瞳の整った顔立ちの少年は頭の後ろで両手を組みながら小声で呟いた。
その声に口を尖らせた三村は先程の少年に切り返す。
「うっせ！ほっとけ！」
三村は１７歳の日系ハーフの少年、ロイ・カブラギ陸士長を睨む。
「あらあらぁ～、相変わらずですねぇ、お二人さんはぁ～」
ロングヘアの流れる黒髪に垂れ目で大人びた顔立ちの女性はＤカップの胸の前で腕を組む。
微笑みを湛えるその２０歳の女性、比叡彩花（ひえい あやか）三等陸曹はいつもの光景を温かく見守る。
「はいはい、そこまでですよ」
黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちのボーイッシュな少女は手を叩きながら二人を諌める。
「全く、相変わらずなんだから！」
１９歳の少女、氷川優（ひかわ ゆう）一等陸士は腰に手を当てながら嘆息を漏らす。
「と、そういや幸成は？」
ロイは周囲を見渡しながら呟くと、助手席で爆睡している少年を見付け微かに笑う。
「寝てるよ……」
ロイは頭をポリポリと掻きながら助手席に向かって歩き、爆睡している少年の頭に一撃を叩き込んだ。
「っいった！」
少年は頭を押さえ、眠い目を開けながら、半ば憎らしそうにロイを見上げる。
その見上げた切れ長の目の片方、左の瞳は紅く染まっていた。
紺色のセミショートに整った顔立ちの少年は大きな欠伸を漏らすと助手席から降りた。
１７歳の直江幸成（なおえ ゆきなり）は六部屋ある荘を見て再び大きな欠伸を漏らす。

「着いたのか？」
「ああ。おっちゃん、説明をよろしく」
「おう！」
三村は咳ばらいをするとワゴン車の荷台からノートパソコンを取り出し、ディスプレイを指差す。
そこに映し出されていたのは華景市の航空写真だ。
「今回華景市に潜入したのは他でも無い。シュトレイゴイカバールの情報を掴んだ。自分達はそれを殲滅する。ここまではいつも通りだな？」
三村の声に全員が頷くと、画面が変わる。
「今回、シュトレイゴイカバールがある財閥と接触した形跡が見付かった」
「財閥ですかぁ～」
彩花は間延びした声で問い掛ける。
彩花が喋ると妙に気が抜けてしまうのはその口調か容姿か、判然としないがどちらにせよ和んでしまう。
「神宮寺財閥。華景市を拠点とする財閥で市の資金源とさえ言える財閥だ。生命工学に突出した財閥だけに、シュトレイゴイカバールがその財閥に接近したのは何故か調べる必要がある。自分達はそれを調べながら、ヘクセを狩る」
「潜入調査ですか？」
「簡単に言えばそういう事だ」
優の声に答えた三村はエンターキーを押すと画面が変わる。
映し出さたのはストレートヘアでセミロングのボブカット、可愛い顔立ちに赤縁の眼鏡の少女の写真が映し出された。
「神宮寺鳳寿（じんぐうじほうじゅ）、神宮寺財閥の御令嬢だ。現在、華景高校で一年生をやっている」
「成る程……ん？おっちゃん、さっき潜入とか言ったな？」
幸成は首を傾げながら苦笑いを浮かべると、三村はニヤニヤと笑って幸成の肩を数回叩いた。

「察しがいいじゃないか？流石、ＨＡＷＫでエージェントを担当しているだけあるな。お前には華景高校に潜入してもらう」
ＨＡＷＫの隊員は五人。
その役職は五つあり、それぞれエージェント、オペレーター、メディック、メカニック、トランスポーターとなっている。
それぞれその名前の通りの仕事である為、察して頂くという形で……
幸成はエージェント、ロイはオペレーター、彩花はメディック、優がメカニック、三村がトランスポーターを担当し、任務を行っている。
ここで話を戻そう。
「おっちゃん、それはおかしい！いや、確かに俺はエージェント担当だけど……俺、大学の過程修了してるし！」
「つべこべ言わない！お前は本来だったら高校生だ。学校を嫌がるとは引きこもりの前兆か？」
「いやいやいや！！」
「はいはいぃ～。まぁ、青春を楽しめるのですからぁいいじゃないですかぁ？ウチはそんな余裕は無かったですよぉ？」
彩花は幸成同様、大学の過程を修了し、医師免許を持っているが、高校での青春時代を送れなかった。
そんな人の言葉を無下に出来るはずもなかった。
「まぁ、彩花さんがそういうなら……」
幸成は嘆息を漏らしながら呟くとロイが「羨ましいね～」とほくそ笑む。
人の不幸でメシウマ、つまり「他人の不幸は蜜の味」という意味の笑いではないが、このロイの笑い顔、妙に腹立つ。
そんなロイに三村はこれこそメシウマという顔で言い放った。
「ロイ、お前もだ」
「俺もかよ！」
「当然だろう？エージェントの補佐をするのがオペレーターの役目だ。明日からは新学期。そこにお前達が転校というシナリオで二年

生に入ってもらう」
「ボクも一歳若ければ入れたのに」
優は頬を膨らませながらそっぽを向く。
何か、不安になってきたな、ホント……
幸成は空を見上げると苦笑いを浮かべたのだった……

登場人物：ＨＡＷＫ（前書き）

登場人物：ＨＡＷＫ

登場人物：ＨＡＷＫ

直江　幸成　（１７）

階級：陸士長

コードネーム

「ロメオ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」では現地に赴く「エージェント」を担当している。大学の教育過程を修了している。紺色のショートヘアで切れ長、左目が赤い瞳のオッドアイ、身長は１７２ｃｍ、整った顔立ち。性格は平時は真面目で礼儀正しい好青年、有事は仇成す者は皆殺しにする冷徹な性格。ヘクセ秘密結社「シュトレイゴイカバール」を追って華景高校に潜入調査をする事となる。

ロイ・カブラギ　（１７）

階級：陸士長

コードネーム

「スカイアイ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」ではエージェントを補佐する「オペレーター」。金髪

のセミロングを後ろで結んでいる。身長は１７４ｃｍ、青い瞳に整った顔立ちの日系ハーフ。女垂らしな性格で女性を見たら声をかけずにはいられないが、作戦時には真面目に幸成をサポートし、監視カメラをハッキングするなどしてサポートする。共に華景高校に潜入する。

比叡　彩花　（２０）

階級：三等陸曹

コードネーム

「アンビュランス」

一人称「ウチ」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」では治療を担当する「メディック」。垂れ目で大人びた顔立ち。身長は１６５ｃｍ。Ｄカップ。おっとりとした口調で喋る。１８歳で大学の卒業過程を終了しており、薬品の知識は医者と同等かそれ以上。

氷川　優　（１９）

階級：一等陸士

コードネーム
「アーキテクト」

一人称「ボク」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」ではエージェントの武器を作る「メカニック」を担当している。黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちの為、美少年に間違われるがボーイッシュな少女。Ａカップ。身長は１６８ｃｍ。可愛い物と銃が大好きと変わった趣味を持つ。意中の人には尽くす性格。家庭的で家事が得意。

直江　三村　（３４）

階級：三等陸佐

コードネーム
「フリューゲル」

一人称「自分」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」においてエージェントを輸送する「トランスポーター」を担当している。「ＨＡＷＫ」の中で最年長。口周りに無精髭を蓄えていて、体格はガッチリしており、目が細い。身長は１８１ｃｍ。面倒見がいい性格でノリがいい。部隊の仲間からは「おっちゃん」や「直江さん」と呼ばれている。

１―２：登校

晴れ渡る青空。
雲の無い青空の薄い青は人の心を落ち着かせる。
その薄い青に輝く太陽は街を明るく照らしていた。
小さなこの市は中心街も人通りが少なく、車の通りも少ない。
田舎とも言えるこの市の中心街に幸成とロイが潜入を命じられた「華景高校」がある。
華景高校は生徒数が４５０人程度の学校だ。
華景高校から幸成達が暮らすアパート「雫荘」は徒歩２０分。
軽い運動には調度いい距離だ。
幸成は紺色のブレザーにネクタイ、淡い藍の鼠色がかった色「湊鼠」のズボンに身を包み、カバンを肩に担ぎながら空を見上げた。
「晴れてるな……」
思わず呟いた幸成は左目に触れた。
流石に紅い瞳は隠さなければと、彩花が気を利かせて買ってきたのが黒のカラーコンタクトだ。
実際、カラーコンタクトで瞳は隠れたが、カラーコンタクトは目にあまり良くないと聞く。
多少目に違和感があり、早く馴れなければと溜息を漏らす。
その時、幸成の横でロイの声が聞こえ、幸成は溜息を漏らして、ロイを見遣った。
単純に言おう。
ロイはナンパをしていたのだ。
ロイがナンパしていたのは墨を流したような美しい黒髪を肩まで伸ばし、左右前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている少女だ。
身長は１６２ｃｍ、二重瞼で目鼻が整い、唇も潤い、綺麗なピンク色をしている。
ＨＡＷＫの巨乳担当の彩花よりも大振りの胸が思わず目に入った幸

成は反射的に目を逸らしつつ、道の反対側にいるロイに歩み寄った。
「君って華景高校の生徒？何年生？」
「あの……えっと……」
返答に困っている、白く典型的なセーラー服を着た少女は怯えたように周囲を見渡している。
田舎だからナンパの経験が無いようだが、このプロポーションと容姿なら間違いなく東京等の都会でナンパかモデルスカウトに捕まりそうであった。
ロイが返答に困っている少女に、答えを待たずに次の質問をしようと口を開いたその時、幸成の拳がロイの頭に直撃する。
頭を押さえたロイが口を開くより早く、幸成は「すいません」と少女に一礼し、ロイの襟を掴んで足早に学校に向かって行った。
「何だったのかしら？」
少女はキョトンとしながら、ロイを引きずって行く幸成を見送った。
「サヤ～、おはよう」
サヤと呼ばれた少女は振り返ると、駆け寄ってくる小柄な少女に挨拶を返し、学校に歩いて行った……

先程の少女から離れた事を確認した幸成はロイの襟から手を離し、溜息混じりに呟いた。
「お前は何なんだ？」
「何なんだとは、何だ！」
幸成に毅然とした態度で返したロイはやたらと堂々としている。
本当に何なんだ、コイツは？
「仮にも潜入だ！！朝っぱらから堂々とナンパする奴が何処にいる！？」

「ハッハッハー！ここに居ますぜ」
ロイは悪びれずに自らを親指で差す。
……ダメだ、コイツ……
幸成は紺色の髪を掻き上げると面倒臭そうに、苛々しながら多少声を荒げ、ロイに言う。
「おっちゃんに目立つなって言われてるんだから少しは自重しろ！！ナンパは悪い事とは言わない……いや、悪い事だが……登校初日でアホな事をやらかすな、アホ！」
「……幸成、声大きい」
ロイの言葉にハッとした幸成は周囲を見渡す。
学生や通勤者の視線が幸成に集まり、周りの視線を独り占めとはまさにこの事だった。
幸成は声のボリュームを落とし、続ける。
「とにかく、だ。目立つな！」
「はいはい」
ナンパしてた時より目立ってたんだが、とツッコミたい衝動を喉の奥で飲み下したロイは頭の後ろで手を組んだ。
なんだかんだ、気が付いたら既に学校の前、二人は校門の中に入った。
華景高校は木造で、四階建ての学校だ。
木造と言っても、昭和をモデルにしたドラマで見るような風情がある学校ではなく、真新しい学校だ。
元々は古い学校だったが、神宮寺財閥が資金を出して、今の学校のような木の学校に新しく建て替えたという訳だ。
木の温かい雰囲気を醸し出す華景高校に入ると、木の心地の良い香りが二人を包み込む。
杉の柔らかく、温かい香りを二人は肺一杯吸い込むと、幸成は昇降口前の校内の案内地図を見る。
昇降口から右に曲がれば職員室、左は教室棟だ。
取り敢えず転校初日の挨拶にと、幸成とロイは上履きに履き換えて、

職員室に向かう。
「しかし、その監視対象者が一年生なら、一年生に編入させればいいだろうに……」
手を頭の後ろで組んだロイが呟くと、幸成がロイを一瞥して答える。
「いくら潜入調査って言っても、年齢的な外見はごまかせない。しかも、学費は払わなきゃいけないだろう？学費が二人合わせて二年分しか出なかったそうだ……」
流石、貧乏部隊と二人は同時に溜息を付いた。
ＨＡＷＫは民間に極秘で吸血鬼と戦っている少数精鋭の部隊、と聞けば最強と誉れ高い特殊部隊の「ＳＡＳ」や映画等でも有名な「デルタフォース」といった特殊部隊を思い浮かべる人も多いだろう。
しかし、ＨＡＷＫは吸血鬼（ヘクセ）という非日常を相手に、しかも極秘で戦うという理由で防衛費は少ししかもらえていない。
何故なら、政府高官や一部の自衛官しか知らないヘクセという存在に防衛費を多く出したら、それこそ金の流れを辿って最終的にＨＡＷＫにたどり着いてしまう。
貧乏とは言っても、最低限の弾薬の補給や武器の支給も行われているが、それもやはり最低限。
支給される弾薬は「９ｍｍパラベラム弾」と言われる威力が低い拳銃に使用する弾丸と、武器は米軍が使用する「Ｍ９」ことベレッタ社の拳銃「Ｍ９２ＦＳ」のエリートモデル「Ｍ９２ＦＳ－エリートＩＡ」が数丁。
極秘部隊なら映画で暗殺に用いられる「サプレッサー」という弾丸の発砲音を抑制する装備も使うと想像するだろうが、実際サプレッサーは消耗品であり、用いる事が出来ない。
その為、わざわざ部隊に武器を改造する整備士（メカニック）という職業が設けられているのだ。
そして今回の潜入の拠点も木造六部屋の小さなアパートという訳だ。
唯一、ヘクセは創作上の吸血鬼とは違い、心臓に杭を撃ち込む事をしたり、銀の弾丸でなければ倒せないという訳ではない事が救いだ

ろう。
それでも大量の弾丸が必要だが……
「「貧乏って辛いな……」」
二人は同時に呟くと、校長室の扉を開ける。
二人が挨拶をするより早く、学校長「佐藤正臣（さとう まさおみ）」は二人に笑顔を見せた。
「君達か、転校生は？」
「直江幸成です」
「ロイ・カブラギです」
「二人ともそう硬くならずに、気楽に構えて下さい。そこに掛けて下さい」
「「失礼します」」
二人は同時に答えると、黒いソファに腰掛け、佐藤も腰掛ける。
「君達には二年生のBクラスに入ってもらう。この学校の事で分からない事があったら、Bクラスの学級委員長に頼むといい」
「学級委員長？」
幸成が小さく呟くと、扉が開く音が聞こえ、優しげな声で入室の挨拶が聞こえてきた。
佐藤はゆっくりと立ち上がると声の主を見ながら「彼女が学級委員長の三神沙耶那（みかみ さやな）さんです」
二人がソファから立ち上がり、後ろの校長室の扉を見ると同時に素っ頓狂な声を漏らした。
狐につままれたような、所謂ポカンとした顔で少女を見る。
少女は、朝にロイがナンパしていた少女だ。
「貴方達は朝の……」
沙耶那は口を掌で隠し、驚いている。
第一印象は最悪だろう……
幸成は恨めしそうにロイを見るが、ロイは運命の出会いといった表情で喜んでいる。
誰のせいで胃が痛んでいると思ってんだ、このスタイリッシュ能天

気野郎？
幸成は軽く胃を押さえつつ、少女に会釈すると少女ーーー沙耶那は満面の笑みで返した。
「直江さん、カブラギさん、校長先生からお話は伺っております。ようこそ、華景高校へ」
沙耶那は天使のような温かい笑みで二人を迎え入れたのだった……

1―3：初日

職員室を出て、昇降口を通った三人は奇妙な雰囲気だった。
初対面という事も有るだろうが、それよりも最大の原因は朝のナンパだろう。
いくら三神沙耶那が学級委員長で、寛大な人物でも流石にナンパは……
幸成は深い嘆息を漏らすと、「三神さん」と沙耶那の名前を呼び、歩みを止めた。
「朝は本当にすいませんでした」
取り敢えず今は謝るしかない。
失礼をしたのはこっちなのだから……
「この馬鹿が失礼な事を……」
「馬鹿野郎！可愛い女の子を見たら声をかける。基本だろう」
何の基本だよ？
幸成は素早くロイの後頭部を押して、無理矢理謝らせた。
まるで犯罪を犯しても、悪びれない息子を謝らせる親の気分だ。
沙耶那は数回目をしばたたかせると笑みを見せた。
「朝の事は気にしないで下さい。ビックリはしましたけど、気にはしてませんから」
鈴の音のように済んだ笑い声をしてみせる。
つくづく良い人で良かったと思った幸成は顔を上げて笑みを返した。
「教育棟の三階が二年生の教室です」
沙耶那は階段を上がりながら続けた。
「二階は三年生、四階は一年生です」
「一階は何の教室ですか？」
「一階は補習の教室ですよ。テストで赤点を取ったらその教室で放課後、一ヶ月の間勉強をして、その後追テストを行って八割の点数を取ったら晴れて自由の身となります。とは言っても内容は難しく

なりますので、中々自由には成れないですが……お二人共、気をつけて下さいね？」
「だってさ、ロイ」
幸成はロイを肘で小突くと「俺！？」と素っ頓狂な声を漏らす。
大学を修了している幸成はともかく、高校を修了していないロイには少なからず関係のある話だろう。
その時、二人の様子を見ていた沙耶那は口に手を当てて笑った。
「お二人は仲が良いんですね？」
「まぁ、仕事の都合ですから……」
「仕事？」
幸成の「仕事」という単語に沙耶那は小首を傾げた。
やってしまったという後悔よりも先にごまかす言葉が幸成の口から飛び出す。
「はい。身内の仕事の都合です。俺とロイの身内の人、同じ仕事場で働いているので転勤したら毎回一緒の学校に転校になるんですよ」
少なくとも嘘は言っていない。
ＨＡＷＫのメンバーは身内同然だし、ヘクセを狩るという「仕事」には変わり無いからだ。
言葉とは少し変えれば真実にも偽りにも変わり、解釈の仕方でどのようにも捉えられる。
結局、言葉とはそういう物だ。
幼い時から話術を仕込まれた幸成には造作も無い。
「だからそんなに仲が良いんですね」
沙耶那はニコリと微笑み、階段を上り切る。
しかし、よく笑う人だと思い、幸成は沙耶那の後ろ姿を一瞥した。
揺れる黒髪が窓から漏れる光を浴びて光り、その美しい色を際立たせる。
モデルのようなプロポーションに見とれているうちに、教室の前にたどり着いた。
一クラス約３０人の男女共学の教室からは転校生が来るという事に

浮かれている為か、妙に騒がしい。
たいていの場合、男子は女子が、女子は男子が来たらテンションが上がるものだと聞く。
悪いな、二人とも男で……
幸成が自嘲的な笑みを見せると同時に沙耶那が教室の扉を開け、中に招き入れる。
二人は一礼しながら入室すると女子の黄色い声が響き渡り、幸成は思わず気圧された。
ロイはというと何故か英雄気取り（？）で手を振っている。
能天気でいいよな……
いや、俺が気負い過ぎ？
幸成は苦笑いを浮かべるとクラス全員を見渡す。
「自己紹介をお願いします」
沙耶那が二人を見ると、ロイから口を開いた。
「ロイ・カブラギ。よろしく頼むわ。ちなみに女性なら可愛ければ誰でもＯＫだ」
相変わらずだ……
とは言っても、こんな馬鹿が国の密命を受けた者だとは誰も思わないだろう。
「直江幸成です。早く馴染めるように努力します。よろしくお願いします」
同時に女子の黄色い声が教室中を揺るがし、幸成は苦笑した。
何なんだ、この空気は……！？

正午になり、雫荘で待機していた優が昼食のチャーハンを作っていると、挨拶に廻っていた三村と彩花が帰ってきた。

二人は同時に居間に大の字に倒れる。
雫荘の一部屋の広さは居間が8畳、お風呂、トイレ付きでキッチン完備、と聞けば良いだろうがやはり貧乏部隊。
かなり古い建物であり、ゴキブリは勿論、蛇や蜥蜴も入って来る始末。
しかも、元は幽霊屋敷と言われていた為、優とロイから猛反対された。
ちなみに彩花は大賛成であった……
結局、三村のごり押しと予算の都合でこの雫荘となったのだ。
「お疲れ様」
優はフライパンのチャーハンを三等分に皿に盛り、両手で器用に運び、中央のちゃぶ台に置いた。
「どうだった？」
優は蓮華をそれぞれのチャーハンに差しながら問い掛ける。
挨拶、というのは実際の所は建前であり、この街の噂を収集する為だ。
噂には都市伝説も含まれる。
つまりは口裂け女や人面犬等の話だ。
火の無い所からは煙りがたたないとは言ったものだが、実際はその通りである。
口裂け女も、紐解けば様々な事件が、まるで伝言ゲームのように口頭で語られるうちに変化していったのがよく分かる。
ましてやヘクセ自体が殆ど都市伝説のような物であり、噂として語られるならまさしく、口裂け女のように語られているだろう。
そう踏んだ三村は情報、つまり噂を収集していたのだ。
「収穫有り、だ」
三村はチャーハンの蓮華を掴むと一口食べてから続けた。
「最近、この街で変死体が多発しているらしい。血を吸われた死体が、な」
「ヘクセですねぇ」

彩花はのほほんと応えると、三村はチャーハンを掻き込む。
作った本人としてはしっかり味わって欲しいと思うだろうが、任務の話の時はさして気にしていなかった。
「学生達の間に流布していた『血吸い人』の話に酷似している」
「血吸い人？」
「夜、帰りを急いでいた女性が血吸い人に襲われて、血を吸われるという話だ。現代版吸血鬼伝説みたいな都市伝説だがそれが現代に蘇ったと住民達は噂している」
「噂って凄いですねぇ」
彩花はいつの間にかチャーハンを食べ終え、そしていつ煎れたか分からない紅茶を啜っている。
彩花って凄いと優は苦笑いを浮かべた。
「今回、シュトレイゴイカバールを相手にするという事情から、政府から偵察衛星を貰った。アメリカ軍のお下がりだから、旧式だが……」
やっぱり貧乏部隊……
が、偵察衛星を貰えただけ良しとしよう。
三村はチャーハンを食べ終えた皿に蓮華を置き、白いワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえた。
そして、煙草に火を点して、肺に紫煙を吸い込むと一気に吐き出し、小声で呟く。
「幸成、楽しくやってるかな？」
「心配なんですかぁ？」
彩花は新しい紅茶にミルクを入れて、スプーンで掻き混ぜると口に運ぶ。
飲む前に香りを味わうその姿は優雅で上品なお嬢様そのものだ。
「まぁな……あまり人と触れ合う事が無かったからな、幸成は……」
「レンジャー徽章乙、空挺徽章、格闘徽章、体力徽章、射撃徽章を保有でしたっけ、彼？」
「特殊作戦徽章もだ」

徽章（きしょう）とは優秀な自衛官に送られる、言わば勲章と思って貰えればいい。
それは様々な物があるが、陸上自衛隊は１５種類有り、そのうちの６種類を幸成が有している。
「幸成は小さな時から訓練を受けていたから、無理は無い。化け物じみた体力と回復力、そして瞬発力にあの瞳……自分だって、最初はヘクセを疑ったさ」
三村は眉間に皺を寄せながら煙草を吐き出す。
過去を思い出しているようなその顔には深い皺が刻まれていた。
「ヘクセのフェロモン反応は陰性の為、人間という結果が出た。しかし細胞活性速度は通常の二倍。まるでヘクセと戦う事を運命付けられ、この世に生を受けたとしか思えないんだよ、幸成は……」
「だから捨てられていたのかもしれませんねぇ」
彩花は小さく呟くと、紅茶のカップを置いて溜息をついた。
「だが、自分が幸成を拾った以上は最後まで育てるのは当然。そりゃ育ての親なら心配するだろう？」
三村は灰皿に煙草の灰を落とすと、優はチャーハンの器を片付け始めた。
「とにかく、大丈夫ですよ。イジメとかも対処出来そうですから」
「いや、自分が心配しているのはそこじゃない……幸成に彼女が出来るかだ」
「そこですか！？いや、初日に出来たら凄いですけど……出来ないでほしい……」優は聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、彩花は口に手を当て、声音に笑いを含んで優に呟いた。
「頑張って下さいねぇ～」
優は動きを止めると、顔を引き攣らせた。
優の呟きが聞こえなかった三村はというと理解出来ずに、二人を交互に見遣る。
と、不意に三村は思い出したように口を開く。
「そういや、偵察衛星とパソコンとのリンクってどうやるんだ？」

「そういうのはロイ君の担当ですからぁ、ウチ達にはぁ分かりませんよぉ～？」
「仕方ない。あいつらが帰ってくるまで自由時間だ。偵察衛星が使えなきゃ、ヘクセを探すにも探せないからな」
三村はそう言うと、灰皿に煙草を押し付けた……

１―４：昼休み

一方、三村達が昼食を取っていた頃、幸成とロイも昼休みとなっていた。
高校の休み時間は基本的に１０分だが、昼休みだけは昼食を食べる時間も含めて３０分の休みだ。
それぞれが思い思いの時間を過ごす昼休みは生徒達には憩いの時間に等しい。
その中で幸成とロイはそれぞれ購買で買った焼きそばパンとタマゴサラダのサンドイッチを手にしながら屋上に出た。
屋上は中央に数個ベンチがある簡素な所で落下防止用の金網が張ってある程度だ。
二人はベンチに座るとパンの袋を開ける。
食欲をそそる香りが二人の胃袋の虫を唸らせた。
「腹減ってたんだな」
幸成は小さく呟くと、焼きそばパンを咀嚼する。
「お前は良いよな、ホント」
「ロイ、どうした？」
「お前、女にチヤホヤされ過ぎだぜ？」
「そうなのか？」
幸成は素っ頓狂な声を漏らすと再び、パンを咀嚼した。
朴念仁（ぼくねんじん）、唐変木（とうへんぼく）を体現する幸成はと言うと、女子に黄色い声をあげられ、女子が周りを取り囲み、昼食に誘われるという男子なら憧れるであろうハーレム状態となっていた。
そしてそれを全て蹴るという愚行を犯した幸成は今に至る。
ロイはというと逆に女子からではなく男子に受けていた。
男子はお調子者や目立つ者を囃し立てる傾向が有るが、ロイはそれに当て嵌まり、一躍男子の人気者となったのだ。
最も彼にとっては不本意であり、幸成のような行為は恨み節の対象

になる。
「どうして幸成だけモテるんだ！？」
ロイの魂の叫びに幸成は冷静に突っ込んだ。
「その性分だろう？」
「マジで返されると返答に困るんだが……」
「顔は良いのだから、考えられるのはそれだけだろうからな」
「つまり、黙ってればイケメンって事か？」
「そういう事になるだろうな」
幸成はそう答えると紙パックの小さな牛乳にストローを差した。
「モテてる奴に本気で返された時の破壊力半端ねぇ！」
しかし、今日はよく喋る、と幸成は横で騒ぐロイを一瞥し、牛乳を吸う。
と、その時、屋上のドアが開き、見知った顔が現れた。
「あれ？先客がいた」
沙耶那は二人を見付けると微かに微笑む。
手には女の子らしい可愛い風呂敷に包まれた弁当箱がある。
そしてその沙耶那の後ろには別にもう一人、小柄な少女がいた。
薄い茶髪に右側のサイドテール、前髪は自然な感じで童顔な少女は、外見だけでは高校生とは分からず、小学生に見紛う程に小柄だ。
「サヤ～、この人達が転校生？」
「そうだよ、ナツ」
沙耶那はナツと呼んだ少女を一瞥すると二人に紹介する。
「こちらは私の友達の藤宮菜月（ふじみやなつき）ちゃん。Aクラスだからあまり交流ないだろうけど、仲良くしてあげてね」
「サヤ、子供扱いしないでよ！取り敢えずよろしくね」
菜月が笑い、その口元から八重歯が零れた。
その八重歯が彼女の幼さを強調している。
流石にこの幼女と言える少女にロイは手を出さないだろうと幸成はロイを一瞥した。
が、その考えは甘かったと打ちのめされる。

「俺はロイ・カブラギ。可愛い女の子なら誰でもいい！ストライクゾーンしかない男だ！」
「……つまりは変態さんって事だよね？」
菜月の一言はロイの熱い魂を木っ端みじんに粉砕するには十分であった。
アイデンティティをクラッシュされたロイは呆然と、真っ白に燃え尽きる。
そう、真っ白に……
「いつもここで昼食を食べてるんですか？」
「うん。そうだよ」
菜月は笑みを浮かべて頷くと向かいのベンチに腰を下ろした。
ベンチにギリギリ足が届く程度の身長の菜月は足をパタパタと動かす様子はどう頑張っても子供にしか見えない。
「女子は皆騒いでたよ？王子様が現れたってさ」
菜月は風呂敷を開けて弁当箱の蓋を開ける。
「王子様って俺か？」
ロイの一言に菜月は笑みを掻き消し、不穏な笑みで切り返す。
「変態さんな訳無いじゃん、馬鹿なの？」
この子、おっかねぇ……
幸成が苦笑いを浮かべると、沙耶那は弁当を口に運ぶ。
菜月はと言うと、幸成をまじまじと眺めている。
「カッコイイよねぇ？え～っと……」
「直江幸成です」
「ユキ君だね？芸能事務所に所属してたりする？」
「いや……」
「勿体ないよ、絶対売れるだろうに……」
「俺はそういうの興味ないから……」
「釣れないなぁ」
菜月は頬を膨らませると水筒の蓋をコップの代わりに、少し濁った水のような液体を注ぎ、口に運ぶ。

スポーツドリンクのような液体を口に運んだ菜月は一息つく。
「またそれ飲んでるの？」
「美味しいよ？サヤもどう？」
「私は遠慮するよ」
「その飲み物は？」
幸成の問い掛けに菜月は飲むかと目で問い掛けるが、幸成は「いい」と答える。
「そう言えば、夜に外に出ちゃ駄目だよ」
菜月は水筒に蓋を取り付けながら首傾げながら上目で幸成を見る。
「どういう事ですか？」
「最近、無差別殺人が起こってるんですよ」
「三神さん、無差別殺人とは一体？」
「沙耶那でいいですよ」
沙耶那は柔らかい笑みで答える。
幸成は咳ばらいをし、「分かりました、沙耶那さん」と訂正した。
「夜に歩いていた人が血を吸われるという事件です。現在、警察が捜査していますが危険な為、市民には夜間の外出禁止令が出ています」
成る程、政府の手回しが既に完了していたか……
「その犯人なんだけどね？運よく逃げ延びた人の話によると白い狐の御面を付けた、刀を持った白い着物の人なんだって」
「白い狐？」
「この市の伝承に白狐（びゃっこ）の伝説があって、鬼を退治して神様になったって話だよ。でも、その狐とは違うね」
菜月は笑い声を漏らすと、沙耶那は真面目な顔で切り返す。
「しかし、生き残った人が錯乱して犯人を見間違えたかもしれないですよ？」
「可能性としてはなくは無いが、そのような出で立ちをしているなら犯人と考えられなくはないですね」
幸成は牛乳パックを握り潰す。

白狐なんて今まで聞いた事がない。
刀を持っていると言っていたが、ヘクセにも武器を持っている者はいるが、御面は見たことがない。
シュトレイゴイカバールの儀式か何かか？
幸成が思考を巡らせていると同時にチャイムが鳴り響いた。
「……俺達はもう行くわ」
「分かりました」
「おい、行くぞ」
真っ白に燃え尽きたロイを無理矢理立たせると幸成は歩いて行く。
アイデンティティを完全破壊されたロイは力無く幸成に引っ張られて行った……

古い教会……
錆びた十字架と寂れたステンドグラスとイコン画。
そこには多数の老若男女が集まっていた。
中央の蝋燭が立てられた台座の前に立つのは若い男性だ。
男性は旗が括り付けられた槍を掲げている。
旗には紅い月をバックに髑髏(どくろ)があり、その髑髏に交差する鎌が描かれた悍ましい物だ。
「我々、シュトレイゴイカバールは計画の第一歩を歩き出す。今日が最初の一歩だ。この世の下等な人間は奴隷と食料に……そして我々、ヘクセが世界を築き上げる」
男の声に多くの者が歓喜の声をあげる。
「「下等な人間供に死を！！」」
彼らの輪唱が周囲を揺るがし、教会に谺する。
「人間は我々を化け物として扱ったが、二度の大戦を引き起こした

人間は我々以上の化け物だ。このままでは人類が滅びる。我々が愚かな人間に代わり、世界を支配する」
輪唱が結託の声に変わる。
古いプロパガンダのような演説を終えた男は片手を高く振り上げた。
「さぁ、ゲームの始まりだ！！」

設定（前書き）

１―４までの設定です

設定

ＨＡＷＫ

正式名：Ｈｅｘｅ　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　Ｗｅａｐｏｎｓ　ａｎｄ　Ｋｉｌｌｅｒｓ

吸血鬼を殲滅する為に作られた特殊部隊。管轄は陸上自衛隊。少数精鋭の為、隊員は５名。存在は民間には極秘とされている。資金の流れから足取りを掴ませない為に防衛費は少ししか貰えていない。

担当

・エージェント

現地に赴き、ヘクセの殲滅を担当する隊員。殲滅以外にも潜入調査やヘクセに捕まった人間の救助等もある。

・オペレーター

エージェントに無線で指示を出す隊員。レーダーや偵察衛星を用いてエージェントに指示を出したり、潜入調査の補佐を行う。

・メディック

エージェントの治療を行う隊員。身体的治療から精神的治療等を行う。また、エージェントを安心させる為に隊員は女性が選ばれる。

・メカニック

エージェントの使う武器や道具を作る隊員。エージェントやオペレーター等の使う武器や機器を作る事が主な任務。

・トランスポーター

エージェントを現地まで輸送する隊員。車の他にヘリコプターを操縦し、現地に向かう為、エージェントの次に危険な担当と言える。

ヘクセ

人間と同じ姿だが、化け物じみた身体能力や特殊な能力を扱う事が出来る人間の総称。所謂「吸血鬼」で人を襲い、血を吸う。「朝に活動出来ない」や「ニンニクの匂いに弱い」、「十字架や銀の弾丸を受ければ体が消滅する」、「心臓に杭を刺せば死ぬ」という事は無く、弾丸等で倒せる。しかし、生命力は当然のように高く、頭を撃ち抜いたり、心臓を串刺した程度では死なない。前述の特殊能力からドイツ語で「魔女」という名前が与えられている。

神宮寺財閥

神宮寺龍一郎が率いる財閥。薬品・生物産業に秀でている。ヘクセと何らかの繋がりがあると思われているが具体的な証拠がなく、財閥という理由で警察も手出し出来ないのが現状。

シュトレイゴイカバール

ヘクセ史上主義の秘密結社。創設者はカズィクル・Ｂ・ツェペシュ。目的は不明。エンブレムは紅い月に髑髏、それに重なる交差した鎌が特徴。人間を夜な夜な拉致して血を吸うという悪業を行っている。人間は勿論、裏切り者のヘクセですら問答無用で殺害する。

華景（はなかげ）市

某県にある市。市では行方不明事件（ヘクセに殺された）が多発している。人口約８００００人、面積は４３０平方キロ。

華景高校

華景市にある最も大きい木造の高校。男女共学。学力は平均レベル。全校４５０人の学校。運営しているのは神宮寺財閥。

雫荘

ＨＡＷＫメンバーが住んでいる木造のアパート。家主は直江三村という事になっている。部屋数は六つ。一部屋は空き部屋。

１０１号室
・直江三村宅

１０２号室
・比叡彩花宅

１０３号室
・会議室兼反省会会場

２０１号室
・直江幸成宅

２０２号室
・氷川優宅

２０３号室
・ロイ・カブラギ宅

血吸い人

帰宅を急ぐ少女が血吸い人に襲われて血を吸われたという都市伝説。

白狐

華景市に伝わる民間伝承。鬼を退治した白狐の話。白い狐の御面に白い着物の姿に刀を持った出で立ち。血吸い人から逃げ延びた人物の証言から明らかになった存在で不確定。また、ヘクセ、シュトレイゴイカバールとの関連性も不明。

1―5：放課後

ホームルームの終わりとともに高校の授業は終わった。
授業が終わり、帰れるという瞬間が高校生のみならず、全ての学生達には学校生活で最も幸せな瞬間ではないだろうか？
担任の話が終わり、挨拶を終えた幸成とロイはカバンを掴んだ。
言ってしまえば彼らにとってここからが仕事であり、学校生活はターゲットである「神宮寺鳳寿」と接触しなければ意味が無い。
しかも学年が違うから会う確率は有っても、会話する確率は圧倒的に低い為、下手をすれば三年生に突入し、さらに下手をすれば卒業で、潜入の意味が無くなる。
なら、こちらから声を掛ければと思うかもしれないが、いきなり訳の分からない人物が声をかけたならそれこそ目立つ。
自然に、かつ確実に探りを掛けるなら、最終的に効率がいいのは「何かきっかけを手に入れてから接触し、信頼を勝ち取る」という事になる。
つまり、運任せ……
エージェントが聞いて呆れるが、現状は仕方ない為、接触出来るまではヘクセを狩るしかない。
「さて、帰るか」
幸成はカバンを掴み、肩に担ぐとロイは「ああ」と答える。
菜月の「変態さん」の一言が相当効いたらしい。
（そりゃ、あれだけストレートに言われれば無理は無いな）
ロイには悪いが良い薬にはなっただろう。
「幸成君、ロイ君、一緒に帰りませんか？」
そう声をかけたのは沙耶那だ。
沙耶那は相変わらず優しげな笑みを湛えている。
どんな事をすれば怒りますか、と聞きたくなる程、笑顔が絶えない。
それに容姿も合わさって、完璧な美少女だ。

そんな沙耶那の後ろにはロイの天敵に成り得る可能性を秘めた菜月が隠れていた。
まるで姉妹のような構図に思わず幸成も頬を緩ませる。
「幸成君達のお家って、確か雫荘ですよね？」
「ええ」
「私の住んでる神社は雫荘の近くですから一緒に帰りましょう？」
「それなら是非」
幸成は笑みを見せると、不意に女子の目線が冷たくなった。
いつかの任務の時に、複数のヘクセに狙われた事があったのだが、その時感じた殺気に似ている。
（こ、ここは戦場か……？）
「行きましょうか？」
「そうですね」
幸成は居心地の悪い殺気に身震いをすると教室を出た……

イヤホンから洩れる音楽に合わせて鼻唄を唄う優は弾薬を作っていた。
正確には改造していた。
机には拳銃弾が分解されている。
彼女のモットーは「古い技術を転用し、最新の物に」であり、今もそのモットーでＨＡＷＫ専用弾薬をを作っていた。
ＨＡＷＫ専用弾薬「９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾」は通常の拳銃弾「９ｍｍパラベラム弾」を改造した優特製の弾薬だ。
ＨＡＷＫは貧乏部隊。
その特性上、消耗品である「サプレッサー」は使えないのが現実。
かと言って、隠密作戦を行う部隊が銃声を漏らす訳にもいなかい。

実際、銃声は「発射ガスの爆発音」だけではない。
自動拳銃を例に取ると、前述の爆発音に加えて、「スライドが動く機械音」と「発射された弾丸が音速に到達する時の衝撃音（ソニックブーム）」が有る。
スライドの機械音を消すにはスライドを手動にしなければならない為、ヘクセ相手の火力不足は否めず、それは出来ない。
しかし、衝撃音と爆発音は消そうと思えば消せると優が豪語し、作ったのが「９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾」だ。
一般的に爆発音を消すのはサプレッサー、衝撃音は火薬を減らした亜音速弾の役割だが、それを弾薬に搭載したのがこの弾薬である。
そこで優が参考にしたのは旧ソ連が開発した消音弾薬「ＳＰ－４弾」だ。
この弾薬は弾丸の下にピストンが有り、そのピストンを無色火薬で撃ち出し、ピストンが弾丸を撃ち出す。
その時にピストンが薬莢に蓋をし、発射ガスを閉じ込めて音を消すという代物だ。
それを９ｍｍパラベラム弾に仕込んだ物が９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾である。
無論、射程は落ちるがヘクセとの交戦は室内の、それも広くない空間が多い為、十分に通用する。
「よし、出来た！」
優はイヤホンを外し、音楽プレイヤーの電源を切ると作った弾薬を予め並べていた弾薬の列に並べた。
彼女はこの弾薬の他にも、古くなったコンピューターを再利用して様々な機器を作るといった事を成し得ている。
弾薬を一通り作り終えた優は背伸びをすると、弾薬を片付けながら時計を見た。
「もう４時過ぎたんだ。夕食を作らないと……」
夜間任務の為、夕食は早めに取り、胃を馴らすというのがＨＡＷＫの慣例である。
優はゆっくりと立ち上がると自分の部屋から出て、一階の空き部屋

―――作戦室兼集会場に向かって階段を下りた。
と、道路に幸成とロイが歩いて来るのが見え、優が帰宅の挨拶をしようとして言葉を止める。
幸成とロイの後ろに女の子が二人。
それもとびっきりの美少女だ。
不意に三村の「彼女」という単語がリピートされた。
「優さん、ただいま」
幸成の声に優は棒読みで挨拶を返し、美少女を見る。
「この女の子達は？」
「初めまして、三神沙耶那です。こちらは友達の藤宮菜月ちゃんです」
「初めまして」
沙耶那と菜月は優に一礼すると笑顔を見せた。
菜月は優をまじまじと見ると口を開く。
「ユキ君のお兄さん？」
「幸成の『お姉さん』の氷川優です」
優は引き攣った笑みを見せると、「家の幸成とはどういった関係で？」と繋げる。
（家のって、いつからあんたの実姉になった？）
幸成は苦笑いを浮かべると、沙耶那は動じず、笑顔で返した。
「私は幸成君のクラスの学級委員長で、二人がクラスに馴染めるように協力してあげています」
「そんな感じ。沙耶那さん、菜月さん、今日はありがとうございました」
幸成は一礼すると「どういたしまして」と返す。
これでは圧倒的に大人げないのが優で、大人の対応をしたのが沙耶那になってしまった。
「私達は今日はこれで失礼します」
沙耶那は一礼し、笑顔を見せると「また、明日」と付け足して歩いて行った。

その背中を幸成とロイが見送ると幸成は優を見る。
「優さん、さっきのはいくら何でも大人げないから」
「何で？」
「全体的に……」
幸成は溜息を漏らすと髪を掻きあげた。
この人は何故か女性絡みになると妙に大人げなくなる。
向きになるというか、美少女なら険悪なムードに成り兼ねない。
自分が女の子に見られないから気にしているのか、と幸成は聞いた事があるが、「歌劇団みたいでカッコイイじゃん」と返した為、それは違うという事が分かった。
しかし、その向きになる理由が分からない。
ロイや彩花、三村は知っているらしいが教えてくれないから尚更もどかしい。
幸成は深い嘆息を漏らす。
「優さん、夕食を作る為に下りてきたんじゃないですか？」
「そうだった」
優は思い出したように呟くと、空き部屋に駆け込む。
「本当に何だろ？」
「お前って本当に鈍いな」
「何？」
「何でもねぇよ」
ロイは呆れたように言い、部屋に向かって行く。
幸成は首を傾げると部屋に歩いて行った……

1―6：開戦

時計の針が１９時を指した頃、パソコンのキーボードを叩いていたロイが背伸びをした。
パソコンの画面には「リンク完了」の文字が踊り、ロイは三村を呼ぶ。
「おっちゃん、衛星とのリンク終わったぜ」
「おう！」
三村は答えるとコーヒーを啜りながら、提供された偵察衛星「ＧＡＲＵＤＡ（ガルーダ）」のリンク画面を見る。
「今回、よく偵察衛星を米軍が貸してくれたものだ」
「それほど、米軍もシュトレイゴイカバールを危険視しているのだろう。ルーマニアに潜伏していたカズィクルを捕らえようとアジトに踏み込んだタスクフォースが皆殺しにあったからな。どの部隊でもシュトレイゴイカバールを消してくれればいいんだろう？」
三村はコーヒーを一気に飲み干し、流し台で食器を洗っている優にマグカップを手渡した。
優はマグカップを洗いながら自慢げに口を開く。
「まぁ、ボクのフェロモンを視覚化する装置を米軍に提供したからって事もあるかもね」
その声に食後の紅茶を優雅に飲んでいた彩花が嘯く。
「でもぉ、ヘクセがフェロモンを使って仲間を認識するというのを突き止めたのはぁ、ウチなんですけどねぇ」
まさにその通りであった。
比叡彩花はヘクセ研究においての第一人者であり、ヘクセがフェロモンを使い、仲間を見分けると突き止めたのは紛れも無い彼女の御蔭だ。
「とにかく、これで俺達はヘクセを楽に見付ける事が出来る。願ったり叶ったりじゃねぇか？」

黒のカラーコンタクトを外し、紅い瞳を見せる幸成がロイのパソコンを覗き込む。
この紅い左の瞳は不気味な光を放つ。
ロイはそんな幸成を一瞥すると、エンターキーを押して衛星の映像を映し出す。
華景市の上空を映し出すその映像は鮮明とは言い難いが地上の人間をハッキリと捉えている。
「お下がりって言っても意外に使えるじゃないか」
幸成が感心すると、ロイは苦笑いを浮かべ、嘆息を漏らす。
「アメリカ軍の偵察衛星の解析力はこんなもんじゃねぇぞ？地面に置いたタバコの銘柄をも読み取れるからな」
「……完全に旧式だな」
幸成は頭を掻きながら、深い溜息をつき、近くにあった銀色のアタッシュケースを開けた。
アタッシュケースには四丁の拳銃とヘッドセット、刃渡り３０ｃｍのナイフが納められている。
それぞれの拳銃は二丁が銃口が二つ有るＭ９２ＦＳ－エリートＩＡ、もう一丁が銃口に銛のようなフックが取り付けられたＭ１９１１Ａ１、もう一丁がグロック２６だ。
それぞれが任務に必要不可欠な物であり、対ヘクセ用拳銃、フックショット、麻酔銃となっている。
「調整は終わっているよ」
「相変わらず良い仕事してるよ」
幸成は手を手ぬぐいで拭いている優の肩をポンと叩く。
三村はその様子を見ると、声高に叫んだ。
「さて、捜索と参りますか。スカイアイ、フェロモン探索」
スカイアイ（ロイ）は文字通り空からの目を用いる。
フェロモン探索とはヘクセの出すフェロモンを視覚化し、人間とヘクセを区別する映像だ。
熱探知「サーマルビジョン」にも似ているその青い画像は人間はオ

レンジ色に表示されるが、ヘクセは緑色に表示される。
さらにヘクセの通った後に残留したフェロモンも探知する事が出来る為、ヘクセが通った跡が一目瞭然となるという訳だ。
このサーマルビジョンならぬ「Ｈｅｘｅ　Ｓｅａｒｃｈ　Ｖｉｓｉｏｎ」、通称「ＨＳＶ」はヘクセを探す部隊には必要不可欠なものである。
ロイは上空から映し出されるＨＳＶを見ながら、驚嘆の声を漏らした。
「流石、夜間外出禁止令が出てるだけあるな。パトカーらしき車が沢山有る」
「ヘクセを狩るにもパトカーを避ける必要があるな……」
「そうですねぇ。警察にもヘクセは極秘ですからぁ、鉢合わせたら面倒ですものねぇ」
彩花は人事のように呟きながら紅茶を啜り、それを飲み干す。
「しかしぃ、奴らが動き出すとしたらぁ、今日ですよぉ？」
「彩花さん、その根拠は？」
幸成は優雅に紅茶を嗜んでいる彩花に問い掛ける。
「敵はこちらの存在にまだ気付いていませんよねぇ？と、言うことはですよぉ？人間の能力を凌駕しているヘクセが大胆不適になるのは必然ですよねぇ？」
「確かに噂に成る程だからそれは有りえる。だが、夜間外出禁止令が出てる以上、獲物は……」
三村が目を細めると、ロイが怒鳴った。
「ヘクセを確認！！警察官が襲われている！？」
彩花は新しい紅茶にミルクとガムシロップを入れると、軽く首を傾げ、笑みを湛えつつ紅茶を飲む。
「場所を指定しろ！！」
「ポイントＡ３エックスレイ、ここから約４キロの地点です！！」
ロイは華景市の地図と偵察衛星を照らし合わせながら怒鳴る。
「了解！！ロメオ、準備だ。自分は先に車を準備する。急げ！」

「分かった」
幸成のコードネームであるロメオを口にした三村は部屋から飛び出し、幸成も黒い夜型迷彩を着込み、次々とホルスターを装着していく。
両腿のレッグホルスターに銃口が二つ着いたスライドがそれぞれ白と黒の拳銃、通称「スコトス&フォース」を仕舞い、ヒップホルスターにフックショット「ドルヒボーレン」、脇に仕舞うショルダーホルスターには麻酔銃「ミューデトラウム」、腰にナイフを指し、最後にヘッドセットを右耳に取り付けた。
「さぁ、ミッションスタートだ」

装備：ＨＡＷＫ（前書き）

ＨＡＷＫの装備。

お粗末ながら使われた武器を解説。

クリス・スーパーＶ

反動を後ろではなく下に逃がす事で銃の跳ね上がりを軽くしたサブマシンガン。

Ｍ９０ｔｗｏ

「ベレッタ　Ｍ９２ＦＳ」の最新型。弾倉のバネをショート化する事により、装弾数を従来の１５発から１７発に増やした拳銃。

グロック　１７

強化プラスチックを用いる事で軽量化に成功した、映画にも度々登

場する有名な拳銃。

装備：ＨＡＷＫ

ＨＡＷＫ－ＥＹＥ

通称

「フューラー」

ヘッドセットに右目に掛かるヘッドアップディスプレイ（ＨＵＤ）を装着した戦略情報機器。ＨＵＤには敵対者の情報を映し出す。また、微妙な筋肉の動きから次の行動を予測してそこから予想される動きも投影される。さらに、フェロモンの視覚化、暗視機能、望遠機能が搭載されている。意味はドイツ語で「探知器」

Ｍ９２－ＨＡＷＫ　ＤＵＡＬ

装弾数：１８＋２

使用弾：９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾

愛称：スコトス＆フォース

対ヘクセ用主力火器。外観は「Ｍ９２ＦＳ－エリートＩＡ」だが性能は上位互換とも言える銃。装弾数は弾倉のバネをショート化するという「Ｍ９０ｔｗｏ」を参考にして、反動はサブマシンガン「クリス・スーパーＶ」と同様のスライダーで相殺する事で両手でも通常に扱えるように、さらに銃身長を伸ばし、競技用の拳銃並の高い命中率を誇る等の高性能を有している。また、グロック１７同様ポ

リマーで出来ている為、弾丸抜きで９００ｇと軽い。銃口は上下二連装となり、射撃と同時に二発の弾丸を発射し、対象に対して致命的な「流体性力学的ショック」を引き起こしやすい。また、マウントレールも搭載され、ＨＡＷＫ－ＥＹＥに連動する特殊なレーザーサイトも搭載している。フルオート射撃も可能で前述の反動相殺機構に加え、発射間隔を抑えており、操作しやすくしている。右手に黒い拳銃「スコトス」、左手に白い拳銃「フォース」を使う。スコトス＆フォースはギリシャ語で「闇と光」を意味する。

ＨＡＷＫ－ＮＡＩＬ

刃渡り：３５ｃｍ

通称

「メッサードルヒ」

ＨＡＷＫ正式採用のコンバットナイフ。長さから鉈や小太刀に近い。刺突や切り付けの両方に特化しており、刺突時には強力な電流を流す。ドイツ語で「短剣＋ダガー」を意味する。

ＨＡＷＫ－ＢＩＬＬ

ワイヤー：３０ｍ
限界重量：１２０ｋｇ

通称
「ドルヒボーレン」

小型のフックショット。先端が鋭利な銛のようになっており、紐は強靭で蜘蛛の糸を参考にし、少しの事では切れない。移動用や敵を引き寄せる等、用途は多様。ドイツ語で「貫通する」を意味する。

９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾

９ｍｍパラベラム弾自体にＳＰ－４弾のようなガス密閉構造を設け、火薬を減らして亜音速弾にした物。射程距離は多少落ちるものの、高い消音効果を発揮し、その音は４５デシベル程度（電話機のベル）。サプレッサーが使えないＨＡＷＫで重宝されている。

ＧＡＲＵＤＡ

読みは「ガルーダ」。ＨＡＷＫが使用する軍事偵察衛星。アメリカ軍からのお下がりであり、旧式の物。カメラにはヘクセの発するフェロモンを視覚化する機能が搭載されている。

９ｍｍパラライズ弾

世界初の対人麻酔弾。弾頭は蚊の針を参考にした小さい針でそこから成分がサクシニルコリンに似た薬品を注入する。また、通常の弾薬より少ない火薬が特徴。刺さった標的は筋弛緩を引き起こし、体を麻痺させる。対人麻酔は薬品の量で死に至る為に使われていなかったが、致死量の直前になると成分が体内分解する薬品が使われている。

グロック２６－ＨＡＷＫ

装弾数：１０＋１
使用弾：９ｍｍパラライズ弾
愛称：ミューデトラウム

「グロック２６」のＨＡＷＫモデル。外観はグロック２６だが、使用弾薬は９ｍｍパラライズ弾を使用し、民間人の排除やヘクセの捕獲・保護に用いられる。サプレッサーを取り付けられ、ヒップホルスターに仕舞われる。愛称の「ミューデトラウム」はドイツ語で「眠い夢」を意味する。

アルムブレスト

装弾数：１
ワイヤー：７５ｍ
限界重量：１８０ｋｇ

クロスボウ。矢にワイヤーが取り付けられている。理由としては貧乏部隊であり、矢を無駄にしない為という理由とヘクセの足を止めるという理由。６倍率スコープが取り付けられ、逃げるヘクセに対して用いられる。基本的に車に積まれている。意味はドイツ語で「石弓」

１―７：追撃

街灯のオレンジ色の光とパトカーの赤い光が周囲を照らす。
まだ日が短いこの地域の夜は早い。
この時間には闇に包まれる。
東京等とは違い、田舎であり、さらに夜間外出禁止令が出ている為、２０時に成らずともスーパーは閉まり、２４時間営業を売りにしているコンビニすらも閉まっていた。
市民は家の中に逃げ込み、本当の化け物――現に化け物ではあるのだが――に怯え、家の明かりは消えている。
まるで昭和の、第二次大戦中の空襲から避ける様子に似ていた。
警官達はパトロールを行い、「血吸い人」を警戒しているのは１９７９年に流布した有名な都市伝説「口裂け女」以来だろう。
「しかし、何もありませんね、金田さん」
若い警官は金田と呼んだ中年の警官に呟くと、助手席で背もたれに寄り掛かっていた金田がハハッと笑った。
「ったく、警官をこんな事で使わないで欲しいな。お前もそう思うだろ、木村」
「そうですね」
パトカーを運転していた木村が車を商店街の方に向けると、背中を向けた黒いローブの男が目の前にいた。
それに気付いた木村は慌ててブレーキを踏み、車を急停止させる。
金田は血相を変えて、助手席から飛び出し怒鳴った。
「おい、君！！旅行者か！？今は夜間外出禁止令が出ている」
男はこちらを振り向かない。
ただ、背を向けて遠くを眺めている。
「聞いているのか、君！？」
金田が男の肩を掴むと、腹に……
金田の腹に鋭い激痛が走った。

激痛というにはあまりにも複雑で、内臓を掻き乱されるというにはあまりにも安直で……
「……っぁ……っはかぁ……」
「痛い？痛いよね？内臓を刃物で掻き乱されて、骨を砕かれて……」
男は体を前屈みにして呻く金田の耳元に呟き、問い掛けると金田の腹から滝のように溢れてくる血を飲み込む。
「うわぁあああ！！」
木村は絶叫すると車をバックさせた。
彼の本能が逃げろと叫ぶ。
その本能に素直に従った木村はアクセルを踏み込み、商店街から遠ざかる。
あれが血吸い人？
だとしたら、自分も……
「死にたくない……死にたくない、死にたくない！死にたくない！！死ぬのは嫌だ！！」
木村は絶叫し、アクセルを踏みつづける。
スピードメーターは１００キロをゆうに超えていた。
赤信号を無視してでも逃げなければならない。
……しかし……
バックミラーには先程の男が映っていた。
１００キロを越えるパトカーに人間が着いて来れるはずはない。
だが……
パトカーの上に何かが乗る音が響き渡り、バックミラーから男が消えた。
「嘘だろ！？おい、嘘だ……」
屋根の上から刃が下り、木村の延髄から突き刺さったその刃が、木村の声を途中で途切れさせた。
１００キロを越えたパトカーは凄まじい勢いでスリップし、パトカーはガードレールに衝突し、停止する……

路上を走る黒いワゴンの電気自動車。
無音のそれは闇に紛れて、街を走る。
黒いワゴン車の中の助手席に座っていた幸成のＨＡＷＫ専用のヘッドセット「ＨＡＷＫ－ＥＹＥ　フューラー」からロイの声が聞こえてきた。
（こちらスカイアイ！新たに警官二人が殺害された。目標は近接戦に特化している模様、オーバー）
ヘクセの戦闘系統はそれぞれは三種類ある。
近距離特化型、遠距離戦特化型、特殊能力特化型の三種類だ。
ヘクセとは言っても武器を使う者もいる。
剣や槍、拳銃や突撃銃等を使うヘクセもいるのだ。
今回はロイの報告から近距離特化と言っているが、実際、特殊能力特化型かもしれない。
と、言うのも特殊能力特化型は超自然的な能力、例えば雷等を操るが、常にそれらを操る訳ではなく、何かしら武器を交えた戦闘を展開する。
つまり、警官を殺害する際に能力を使わなかった可能性も考えられる。
「こちらロメオ、了解した。敵との距離を教えてくれ、オーバー」
（次の角を左に曲がればすぐ見えるはずだ、オーバー）
「了解。何か有り次第、随時、敵の情報を入れてくれ、オーバー」
（分かった。スカイアイ、アウト）
ロイからの無線が切れると幸成は車の後部席に置いていたクロスボウを掴んだ。
クロスボウの矢にはワイヤーが括り付けられている。
どちらかと言えばクロスボウと言うには遠く、鯨の捕獲に使われる

ハープーンに近いそれはＨＡＷＫ隊員からは「アルムブレスト」と呼ばれていた。
アルムブレストはワイヤーで敵の動きを止めるばかりか、銃痕が付けられない屋外の戦闘に用いられる。
アルムブレストに６倍率スコープを取り付けると、ワゴン車の天窓から身を乗り出した。
「ｏｎｅ　ｓｈｏｔ　ｏｎｅ　ｋｉｌｌ」、一撃必殺を意味する狙（ス）撃手（ナイパー）の金言は、クロスボウにも当て嵌まる。
実際、クロスボウは１９７０年代、銃が高性能の消音装置を得るまで特殊部隊で使われていた。
貧乏部隊には持ってこいの武器だ。
「Ｉｔ'ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ！！（ショーの時間だぜ）」
幸成ほくそ笑むと右目に掛かるＨＵＤを「Ｈｅｘｅ　Ｓｅａｒｃｈ　Ｖｉｓｉｏｎ」、通称「ＨＳＶ」に切り替え、赤眼を閉じ、右目に集中する。
サーマルビジョンに似た風景がＨＵＤに映し出され、同時に車が角を曲がった。
パトカーの上に乗っている緑色に映し出される人間がＨＵＤに捉えられ、幸成は赤眼を開ける。
普通の光景とサーマルビジョンが合わさり、奇妙な風景になった。
例えるなら、昔の青と赤のフィルムが取り付けられた３Ｄ眼鏡をかけているのに似ている混ざり方だ。
左目でアルムブレストのスコープを覗き込み、ヘクセと思われる男を中心に捉える。
男の両手には、インドのマラータ族が使っていた、篭手の先から７０ｃｍ程の剣が伸びた防具「パタ」が握られていた。
幸成はゆっくりと引き金を絞ると、男に向かって矢を放つ。
矢が真っ直ぐと男に向かい、ワイヤーが擦れる音が響き渡る。
唯一、消音性を欠く要素がこのワイヤーだ。
が、しかし、矢を現場に残す訳にいかず、ましてや撃った矢をご丁

寧に回収していたらヘクセに逃げられるから仕方ない。
矢が男に当たる瞬間、男は矢に気付き、それを弾いた。
空中に弾かれた矢はワイヤーの限界の長さを越えてアルムブレストに巻き取られる。
男はこちらに睨むと、パトカーからパタを引き抜き、駆け出して行く。
幸成は巻き取られて戻ってきた矢を掴むと三村に叫ぶ。
「おっちゃん！！早くしろ！！」
「分かってるよ！」
三村はアクセルを踏み込み、男の後ろを追跡する。
幸成はＨＵＤを通常のモードである「Ｌｏｃｋ＆Ｌｏａｄ」に切り替えた。
このモードは「敵を捉える（Ｌｏｃｋ）」と、敵の筋肉の微妙な動きから次の動きを導き出し、「ＨＵＤに映し出す（Ｌｏａｄ）」というビジョンであり、通称「ＬＡＶ」と呼ばれている。
風を切って走る男をＨＵＤに捉えた幸成は再びアルムブレストの弦を引っ張り、そこに矢を装填した。
「おっちゃん、奴の後ろに張り付いてくれ」
「分かってる！」
三村が怒鳴るのを聞き、幸成はスコープを覗く。
手ブレと車の揺れ、さらに男の不規則かつ俊敏な動きはＨＵＤに映し出される予想された動きと一緒ではあるのだが、矢が直撃するまでの時間を考えれば間に合わない。
スナイパーライフルでもあればまだマシだったかもしれないと幸成は舌打ちをし、一射目で弾かれた事を憎む。
男が人間には有り得ない速度で街の角を曲がり、車もドリフトしながら曲がった。
タイヤから白煙が巻き上がる。
（こちらスカイアイ！ロメオ、聞こえるか？まずいぞ！！）
「どうした！？」

（次の角に警官がいる！！何とかして止めろ！）
「簡単に言うな！」
（方向を変えるだけでいい！）
「……分かった、やってみる。ロメオ、アウト」
幸成はアルムブレストからホルスターの拳銃型フックショット「ＨＡＷＫ－ＢＩＬＬ　ドルヒボーレン」に持ち替える。
次の角まで約１００ｍ……
「おっちゃん、奴の１０ｍまで近付いてくれ」
「分かった！」
三村はアクセルを一気に踏み込むと、男の後ろの手前、１５ｍまで近付いた。
もう少し……
残り５ｍ……４……３……２……１……
幸成はフックショット「ドルヒボーレン」を構えると、男の数メートル手前に撃ち込み、ワイヤーの巻き取りでそこに引っ張られる。
移動用のフックショットであるドルヒボーレンには自分を移動させる程の力をモーターに出させる「ハイパワー」と物を引き寄せる程度の力の「ノーマル」があり、この強靭で有名な蜘蛛の糸を参考に作られたワイヤーは幸成の体を支えるには充分だった。
刹那、空中を舞う幸成の目の端に何か白い物が映り、そちらの方を見た幸成は言葉を失う。
路地の建物と建物の隙間に、白い着物と太刀を持ち、白い狐の面を付けた人物が立っているのだ……
その一瞬の出来事がスローモーションのように思えた瞬間、幸成の時間が元に戻り、ワイヤーに引っ張られる。
幸成はすぐに集中すると、ワイヤーが巻き取りを終えて男のすぐ手前に幸成は立つ。
即座にナイフ「ＨＡＷＫ－ＮＡＩＬ　メッサードルヒ」を構えると、男は大型のスーパーの方を向くとその屋上に跳んだ。
その高さは約２５ｍ、ドルヒボーレンでギリギリ届く距離だ。

幸成はドルヒボーレンの銃口を屋上に向けると、ワイヤーを発射し、手摺りに巻き付け、ワイヤーに引っ張られる。
ワイヤーが巻き取られて、その長さが限界まで短くなるより早く幸成は手摺りを掴み、屋上に降り立った……

１－８：赤眼の狼

対峙する二人。
まだ薄い月明かりで照らされる二人の姿は片方は人間に見えず、逆に片方は人間にしか見えない。
紅い瞳の少年と黒いローブの男はそれぞれの武器を手に持っていた。
少年は上下二連装の二丁拳銃と男はパタを持っている。
一陣の風が吹き、男のローブが脱げた。
男は痩せ型で目が細く、髪は無い。
パタを下に下ろした男は口を開いた
「君の名前を聞かせてもらおうか？」
幸成は無表情になりながら小さく「ロメオ」とだけ答えた。
「コードネームか？まぁ、いい。僕はディック・チャンバー。シュトレイゴイカバールのヘクセだ」
シュトレイゴイカバールのヘクセの文字を聞いた幸成は眉をピクリと動かす。
「今まではぐれヘクセを狩ってきたが、シュトレイゴイカバールのヘクセと対峙するのは初めてだ」
「そうか……なら、これが最初で最後だっ！！」
チャンバーはパタを両手に凄まじい速度で幸成に駆ける。
風を切る音が響き渡り、幸成はチャンバーの頭を飛び越えてそれを避けた。
「凄い身体能力だ」
チャンバーが笑うと、幸成はスコトス&フォースの引き金を引いた。
放たれる９ｍｍＳＤ弾をチャンバーが、まるで漫画かアニメにあるような動きで弾丸を自分から逸らしていく。
「あまい！！」
チャンバーは怒鳴ると、パタを交差させながら幸成に向かっていき、振り下ろす。

同時に金属の澄んだ音が響き渡り、幸成はナイフ「メッサードルヒ」でその二本を受け止めた。
飛び散る火花が二人の顔を照らす。
二つの手を添えたナイフで受け止めたパタの重圧は凄まじい。
「これは刺さると痛いよ？」
チャンバーはニヤリと笑い、片方のパタでナイフを押さえながら、もう片方を後ろに引く。
この後、刺突が来ると分かっているがナイフに添えている手を離し、片方で拳銃を使うにしても、ヘクセの力を片手で支えられるとは思わない。
幸成は舌打ちをすると顔面に突き出された刃を顔を横にして避ける。
鮮やかな血が幸成の頬とパタを濡らした。
幸成の血をパタから舐め取り、不気味な笑みを見せる。
今度は横に振りかぶり、パタが一閃された。
幸成はナイフから力を抜き、逆に押さえ付けられる事で横に一閃されたパタを避ける。
パタは幸成の髪の先を少し切り、それとは別に空を切った。
先程の押さえ付けられた反動を利用し、上手くかい潜った幸成は再び拳銃を構える。
微かな銃声と同時に放たれる弾丸はまたしてもチャンバーのパタで弾く……
「無駄だよ？無駄、無駄！！」
チャンバーは怒鳴ると、冷静な幸成に問い掛ける。
「君は何でそんなに冷静なの？今から死ぬのが分かっているからかな？」
「逆だ」
幸成は鼻で笑うと二丁拳銃の弾倉を交換し、銃を交差させる。
「どうやって？」
「お前は致命的な事に気付いていない」
「何が？」

チャンバーが問い掛けると幸成は弾丸を発射した。
三度、次々放たれる弾丸を弾いたチャンバーは腕に走る激痛に顔を歪める。
チャンバーの腕からは真紅の血液がパタの付け根から滴り落ちてきた。
「何だ！？何なんだ、一体！？」
「お前は馬鹿だな。その武器は戦場で落とす事は無いが、同時に離す事も出来ない。つまり、下手をすれば自分の腕を痛めるという事だ。そんな武器で弾丸を弾けば常識的にそうなるだろ？Ｒｅａｃｈ！！」
幸成は怒鳴ると、二丁拳銃を連射しながら距離を詰める。
チャンバーは無謀にも血の滴るパタで応戦するが、数発防ぎ切れず、体に弾丸が届く。
幸成が弾倉を交換すると同時にチャンバーはヤケクソに切り掛かるが、腕を痛め、速度が落ちたパタを避けるには容易で、ましてやＨＵＤの予測された動きの通りのチャンバーは遊ばれている状況だった。
「この下等な人間が！！」
「下等な人間にやられてるお前は何だ？」
幸成はほくそ笑むと二丁拳銃をチャンバーの体に押し付けた。
「Ｂｉｎｇｏ！！」
フルオートで吐き出された弾丸は一瞬でチャンバーの体を蜂の巣に変え、弾き飛ばされた。
弾かれたチャンバーに銃口を突き付ける幸成の姿は月光に照らされ、不気味な赤を醸し出している。
「化け物め……」
「吸血鬼に言われるとは心外だぜ」
幸成は右手で拳銃を構えながら、左手で先程、頬に付いた傷痕を擦る。
傷は既に塞がり、ただ、固まっていない血液が手を濡らしただけだ

った。
「ああ、確かに俺は化け物かもしれねぇな」
幸成は自嘲すると、幸成は「良いことを教えてやるよ」と呟く。
「古来、吸血鬼を滅ぼすには六つの方法がある」
そう言うと、幸成は左手の指を広げていく。
「一つ、遺体を火葬する。二つ、水に沈める。三つ、心臓を取り出す。四つ、心臓に杭を打ち込む。五つ、首を切り落とす……」
そこまで言うと、五つ目で開いた手を握った。
「六つ目は狼に襲わせる。名前を知りたがっていたな？俺は赤眼の狼。貴様ら吸血鬼は俺が全員喰らってやる！！」
幸成はその冷たく、残酷な赤い瞳で男を見下ろすと、ゆっくりと引き金を数回引いた。
静かな弾丸は男の頭を粉々に粉砕し、周囲に赤黒いミンチを撒き散らす。
同時に男は衣服や武器を残し、その男がこの世にいた全てを消し去った……

登場人物：華景高校（前書き）

登場人物：華景高校

登場人物：華景高校

三神　沙耶那　（１７）

一人称「私」。華景高校二年生。容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀の万能美少女。うなじが隠れる程のセミショートで、墨を流したような美しい黒髪、前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている。身長は１６２ｃｍ、二重瞼で目鼻が整い、唇もみずみずしい。Ｅカップとスタイルも良く完璧とも言える美少女。天然ボケだが、基本的に面倒見のいい女の子。三神神社に住んでいる。

藤宮　菜月　（１７）

一人称「ナツ」。華景高校二年生。薄い茶髪に右側のサイドテールに、前髪は自然な感じ、童顔で１４９ｃｍと背が低く、よく子供に間違われる。Ｂカップ。笑うと口から八重歯が覗く。明るい性格で子供っぽい。ロイとの仲は最悪。沙耶那とは「サヤ」と「ナツ」と呼び合う仲。趣味は園芸で花を育てる事が好き。毎日スポーツドリンクを飲んでいる。

神宮寺　鳳寿　（１６）

一人称「アタシ」。華景高校一年生。褐色のストレートヘアでセミロングのボブカットに右の前髪部分に髪留め、可愛い顔立ちで赤縁の眼鏡をかけている。Ｃカップ。身長は１５８ｃｍ。ＨＡＷＫの監視対象者。

2－1：二日目（前書き）

第2話

2―1：二日目

カーテンから零れ出る太陽の光が幸成の顔に触れる。
その優しい光が幸成の顔を照らし、幸成はゆっくりと目を開けた。
目を開けて初めて実感出来る、生きているという実感。
ヘクセという有り得ない存在と戦ってから朝を迎えると、いつもこの実感に苛まれる。
幸成は髪を掻き上げると布団から出て、洗面台に立つ。
夜に付いた、あの傷は跡が残らずに消えていた。
掠ったとは言っても、一日で消えるような浅い物ではない。
化け物……
チャンバーの言葉が頭の中で響き渡り、幸成は舌打ちをした。
皮肉にも化け物に言われるとはな……
自嘲した幸成は紅い瞳にコンタクトレンズを入れた。
この瞳が無くなれば、俺は……
「起きてるか～？」
朝から元気なロイの声が部屋に響き渡り、「ああ」と答えて顔を覗かせる。
「二日目だな……彼女出来るかな……」
「……諦めろ、お前には無理だ」
幸成がまさに諦めろといった風に肩を叩く。
「な、えっ！？何、その宣言！余命宣告？それとも死刑宣告なのか！？」
「冗談だよ、冗談」
幸成は呆然とするロイに笑いかけると、不意に昨日の夜のある出来事が甦った。
フックショット「ドルヒボーレン」のワイヤーで移動している時に見た、沙耶那と菜月から語られた「白狐」。
白い着物に太刀、白狐の御面の人物。

あれは？
「ロイ……」
「どうした？」
「……昨日、俺とおっちゃんが追跡している時に他にヘクセがいなかったか？」
「それは無い。あんな開けた所に別のヘクセがいたら、いくら素人でも気付くだろ？」
「いや、例えば路地裏とかは？」
「路地裏か……ただでさえ解析力が低いＧＡＲＵＤＡなのにＨＳＶじゃ、ますます探せねぇよ」
ロイの言う通りだった。
サーマルビジョンに酷似した視界では路地裏等を探すには難しい。青く染まり、さらに路地裏は深い青に染まったその視界から探すのは不可能という物だ。
「何があった、幸成？」
「信じねぇかもしれないが……白狐を見た」
「白狐って……冗談だろ？」
「俺だって冗談だと思うから聞いてんだ。伝承の存在が見えたんだから……」
「一応、録画はしているから後で確認だ」
「悪いな」
幸成は感謝すると、下から彩花の気の抜けた声が聞こえ、朝食だと告げた……

食後は何故か紅茶と決められたＨＡＷＫ隊員。
無論、決めたのは彩花だ。

実際、このメンバーで力関係図を構築した場合、彩花が頂点となる。
ＨＡＷＫ隊員の見解は一定しており、「彩花を怒らせたら毒を盛られそう」や「恐竜の絶滅の原因は実はこの人を怒らせたから」、さらには「人類が全滅する可能性はこの人を怒らせない限り皆無」とまで言われている人物だ。
五人はそれぞれ思い思いに紅茶を飲み、朝を満喫する。
「それにしてもぉ、いきなりシュトレイゴイカバール所属のヘクセを倒せるとは運が良かったですよねぇ」
彩花は薄紅色の紅茶の香りを楽しみながら微笑む。
その様子はやはりお嬢様にしか見えない。
あのような事を言われているとは思えない優雅な様子は、ギャップが有りすぎてこちらが困る。
「だが、何か誘っている感じがしたな……あそこまで大胆にシュトレイゴイカバールが動くとは思えないしなぁ」
三村はレモンティーを啜りながら呟くと、つくづくコーヒーが飲みたいと思う。
幸成もコーヒーに、ではなく先程の呟きに同意した。
「確かにそうだな。まだ、はぐれヘクセ供の方がしっかりと隠れていたからな」
「何らかの組織の意図を感じられるというか、そんな感じだよね？ボクは雑魚を囮にしてこちらの戦力を観察したって感じたな」
戦力の観察？
という事は白狐はシュトレイゴイカバールのヘクセか？
幸成が白狐を頭の中で反芻させていたその時、扉をノックする音が聞こえ思考を止めた。
「はい、今出ます」
三村はレモンティーを一気に飲み干すと扉に向かって歩き、ドアノブを回した。
ドアの向こうに立っていたのはセーラー服に身を包んだ可憐な美少女と小柄で可愛らしい少女だ。

「あれ？可愛らしいお嬢さん方だ」
その覚えのある声を聞いて幸成は三村の隙間から顔を覗かせる。
やはり、とでも言うべきだろうか？
沙耶那と菜月がドアの前に立っていた。
向こうもこちらに気付き、軽く会釈する。
「初めまして、三神沙耶那、こちらは友人の藤宮菜月です」
「こりゃまた、ご丁寧に……自分は幸成の保護者の直江三村。よろしく」
三村は頭に手を当てると頭を下げると、ニヤニヤしながら幸成を一瞥する。
「何だ、幸成？もう彼女が出来たのか？」
「違うよ」
幸成は即座に否定すると紅茶を飲み干し、立ち上がる。
「沙耶那さん、菜月さん。紅茶でも飲んでゆっくりしていって下さい。俺は今から歯を磨きますから」
「では、お言葉に甘えて休ませてもらいます」
「そうだね！モーニングティーって言うの？憧れてたんだよね」
「どちらかと言えばぁ、アフターディナーティーですねぇ。アーリーモーニングティーは朝食前の寝覚めのお茶、そして本当のモーニングティーのイレブンシスはぁ、その名の通り１１時前の飲みますぅ。初めましてぇ、比叡彩花ですぅ。二人の姉とでも思ってくださいねぇ～」
彩花はマグカップに二人の飲む紅茶を入れながら間の抜けた声で笑う。
相変わらずというべきか、手際がいい。
「ゆっくりしていってくださいねぇ～」
彩花はそう言って二人にお茶を差し出した……

2―2：学校へ

ブレザーに着替え終えた二人はそれぞれの部屋の鍵を閉めると雫荘の階段を下り、ＨＡＷＫ隊員の集会所として使われている「１０３号室」の扉を開けて挨拶をした。

「行ってくる」

幸成の声に三村は「行ってらっしゃい」と答えた。

傍目から見れば仲の良い住人達にしか見えない。

仕事仲間と伝えているからそれも違和感無いだろう。

四人が学校へ歩いていると沙耶那が口を開いた。

沙耶那からほのかにアールグレイの独特の心地の良い香りが漂い、幸成は頬を緩ませる。

「最初、幸成君のお父さん見た時ビックリしましたよ。幸成君達の声が聞こえるからノックしたら凄く大きな人が出て来たんですから」

「そうだね。でも、何か全然似てないね？幸成君ってお母さん似？」

返答に困る質問だ、と幸成は苦笑いを浮かべてしまう。

ＨＡＷＫ隊員の素性はそれぞれが殆ど知らない。

軽口をたたき合う二人でさえ、何故ＨＡＷＫに入ったのか分からないのだ。

「……俺には母親と過ごした記憶が無いんだ」

元々捨て子で施設にいたとは言えなかった幸成は自嘲しながら呟いた。

無論、二人は申し訳なさそうに表情を歪ませる。

それを見た幸成は「気にしなくていいから」と笑って見せる。

二人は分かったと笑みを見せるもやはり申し訳なさそうだという表情は変わらない。

「それよりさぁ」と切り出したのはロイだ。

こういう時には非常に役に立つ―――もっとも任務の時は今以上に役に立つのではあるのだが―――ロイは話の転換には最適な人物だ。

「ここってどんな祭りがあるんだ？」
大方、飛び出すのは女の子の話かと思っていた幸成は、肩透かしとでも言うべきか、僅かに感心する。
「華景市には二つの祭りが有ります。明日の三日間の連休にこの街で桜祭りという物が開かれます」
桜祭りと言っても、桜の木には芽しか生えていないが……
幸成は季節外れだと思ったのが聞こえたのか分からなかったが、沙耶那は笑みを浮かべながら続ける。
「桜祭りと言っても花見のような物ではなく、桜の花が咲く事を願う為の祭りです。昔の風習と言いますか、儀式のような物ですね。勿論、一日目は私の神社で舞が披露され、二日目からは露店が並びます」
「サヤの踊りって凄いんだよ？優雅って言うのかな？巫女装束着てさ！時代劇のお姫様か巫女さんがやるような踊りをサヤがやるんだよ」
「それは凄いな。明日が楽しみだよ」
幸成は沙耶那に笑いかけると、沙耶那は恥ずかしそうに顔を赤くした。
その可愛らしい様子に幸成は思わずときめく。
（何か、可愛いな……）
沙耶那はスタイルもいいし、アイドルのようで美少女というに相応しい。
そもそも、幸成は同年代の女性と触れ合った事がなく、恋という経験をしたことが無い。
それもあり、初めての感情に幸成は戸惑う。
「それでもう一つのお祭りというのが夏祭りです。これは盆踊りが行われ、露店並びます。これは街全体が一丸となりますのでとにかく面白いお祭りですよ」
沙耶那は優しく微笑むと幸成は空を見上げだ。
この街はこんなに良い街なのに……

古い教会に集まった６人の男女。
男女はそれぞれ机に向かい、話し合っていた。
会議の張り詰めた雰囲気や談笑といった空気ではなく、緊迫した空気だ。
「……やはり、ディック・チャンバーは死んだか」
「所詮、奴はこの程度だったのよ」
「御蔭で敵の戦力を知る事が出来ました」
「へっ！たかがガキが一人だろ！？俺が片付けてやろうか？」
「……焦る……駄目……」
「そうですわよ。私の放った『虫』も動いてますわ」
「チッ！」
男は舌打ちをし、机に足を乗せた。
「我々にはまだまだ時間がある。焦る事はないさ」
リーダー格の男は引き攣った不気味な笑みを見せる。
「それぞれの力を私は信用している。勝利をこの手に！」
男は教会に響く大きな声で怒鳴ると、それぞれが立ち上がった。
「全ては貴方の為に、ツェペシュ様！」
男女はリーダー格の男の名前を呼ぶと一礼したのだった……

2―3：接触

学校に着いた幸成達は昇降口の下駄箱に向かった。
それぞれの下駄箱は三年間使う下駄箱であり、変わる事はない。
幸成とロイは上履きを履くと、靴を入れる為に下駄箱を開けた。
「じゃ、行こう！」
菜月が子供のように無邪気な笑みを見せると沙耶那も笑みで答える。
靴を入れたロイが何故か固まっている幸成を見る。
「どうした、幸成？」
「……これなんだが……」
固まり、困惑する幸成は下駄箱から三枚の手紙を取り出し、ロイに見せた。
ハート形のシールで封をしているものやピンクの手紙、ルーズリーフを折り畳んでペンで装飾した手紙と様々だ。
「何だ……これは？不幸の手紙か？」
「貴様！モテやがって！！何なんだ！？」
「知らねぇよ！！」
騒いでいた幸成とロイに気付き、沙耶那と菜月が二人に駆け寄ってきた。
「どうしたの～？」
「コイツ、いきなりラブレターもらってやがる！畜生！！羨ましいぜ」
「変態さんには無縁だもんね～」
菜月は相変わらずのアイデンティティクラッシュ技術でロイを撃沈させる。
この子に一級アイデンティティ破壊師の称号を与えてあげたい。
幸成は苦笑いを浮かべると手っ取り早いルーズリーフを開き、読み上げた。
「いきなり手紙を書いてごめんなさい。私、直江先輩と手紙交換し

たいの……一年C組米山麗奈か……困るな、こういうの……」
「……お前、露骨に酷いな」
「は？」
「普通、そういうのはこっそり読む物だぞ？」
「そうなのか？それは可哀相な事をしたな……」
どちらかというと天然だが、犯した自分の非は認めるのが彼の良い所だ。
幸成はカバンにラブレターを仕舞うと深い溜息を漏らす。
正直、馴れない物だと幸成は自嘲を浮かべる。
「幸成、その返事はどうするんだ？」
「そうだな……」
幸成が考えようとしたその時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。
「一先ず行きましょう？」
「そうですね」
沙耶那の声に幸成は答え、歩き出し、角を曲がったその時だった。
凄まじい勢いで弾かれ、幸成は地面に尻餅を着く。
いくら訓練をした彼でも咄嗟の衝撃に耐える術は無い。
幸成が顔を上げると倒れていた少女も顔を上げた。
ストレートヘアのセミロングの髪をボブカットにし、右の前髪の部分を髪留めで止めている。
また、少女の顔は愛らしく、赤縁の眼鏡がアクセントになり、非常に可愛い。
この子は……
「君は……」
「……」
少女は謝るでも無く、廊下を駆けて行った。
と、少女が倒れていた場所には学生証が落ちている。
幸成は埃の付いたズボンを払うと学生証を拾い、開いた。
やはり、とでも言うべきだろうか。
二日目にして早くも接触が出来たのは非常に運が良かったとも言え

るだろう。
１年Ｃ組、神宮寺鳳寿（じんぐうじ ほうじゅ）。
ＨＡＷＫの監視対象者である鳳寿と接触する機会が与えられた事は久しぶりに嬉しい事だとも言えた。
「危ないなぁ！！廊下は走っちゃいけないのに！！」
菜月は子供のように怒る。
本当に子供らしいその様子は非常に心和み、とても高校生とは思えない。
「何か急いでいたのでしょう？幸成君、大丈夫ですか？」
「はい。取り敢えず、一時限目が終わったら返しに行こうかと……」
「あれ？言いませんでしたか？今日は二年生全クラス合同で体力テストが行われるので昼休みまで暇は有りませんよ？」
言ってないですよ、沙耶那さん……
この人はしっかりしているようで、時折何処か抜けている。
そして、やはりタイミングが悪いのはお約束なのか？
タイミングが悪い以前に、お世辞にも運動神経があまり良くないロイはそれこそ死刑宣告を受けたようだった。
学生の方に経験が有る人がいるだろうが、シャトルランや反復横跳び等の体力を著しく使う競技は鬱だろう。
しかも新学期早々、ましてや午前中全てとなると、運動神経の悪いロイには絶望だ。
「腹痛くなってきた」
「急に何言ってんだ、ロイ？」
「授業が無いだけいいじゃないですか？」
沙耶那はのほほんと笑うと、ロイもいつも程ではないが嬉しそうな笑みを見せた。
「おい！お前達！もうすぐ本鈴が鳴るぞ！！教室に入れ」
職員室から歩いてきた職員が騒いでいた四人に注意をすると、本鈴が鳴り響く。
それを聞いた四人は慌てて教室に駆けて行った……

２―４：体力テスト

時計の針が１１時を周り、小腹を空かせ始める時間帯。
その時間帯は早弁をして空腹を満たす人が多いだろうが、今日の華景高校は違った。
学生達が空腹さえも忘れる出来事が起きていたのだ。学生達は体育館に集まり、一人の生徒に注目していた。
その一人の生徒は言うまでもない幸成だ。
幸成は華景高校で行われた体力テスト行った全ての種目の記録を大幅に塗り替え、その様子を見ようと生徒達が集まっていた。
元々自衛隊の訓練で体を鍛え、体力徽章を有する幸成にとって、この程度の事はハッキリ言って造作もない。
そして今は２０ｍシャトルランの最中だ。
２０ｍシャトルランは、２０ｍを特定の音楽が鳴り終わるまでにたどり着き、それを体力が続くまで繰り返す競技だ。
二回連続でミスをしたらその場で終了となり、さらに回数が増える事に音楽の速さが増す。
正直、体力の無い人物には厳しいであろう種目を幸成は涼しい顔で、１８０回近くまでやっていた。
そこまでいくと既にやっている人はいなく、体力自慢のバスケ部や野球部、陸上部らは幸成を何者だ、といった風に眺めながらも戦力に欲しいと思っている。
女子は容姿が完璧で他の男子がへたれ込む中、全く息を切らしていない幸成は注目の的だ。
１００回付近で撃沈したロイは長々と続く、幸成のシャトルランを眺めていた。
不意にロイの後ろから沙耶那と菜月
「ユキ君って、何かスポーツでもやってた？」
「いいや、何も？」

スポーツじゃなく、自衛隊やってます、彼。
「私も１６０回が限界なので尊敬します」
沙耶那は汗を拭きながら微笑む。
女子で、しかも１６０回って十分凄いんだがと１００回前後のロイは苦笑する。
ちなみに女子一位、総合二位の彼女も十分に化け物と言えた。
勿論、胸的な意味も含めてである。
彼女の大きな胸は体操服にはキツイ為、殊更胸を強調し、止めと言わんばかりに走る度に上下に揺れる胸の前に、男子はテント設営者と出血多量者多数という状況だった。
ちなみにロイは前者である……
ついでに言うと、大きなお友達は菜月のぶかぶかの体操服という緩ロリな格好に全滅したのだった……
２００回を越えた辺りで先生は時間の尺という物で終わってしまった。
同時に体育館には幸成を讃える拍手が鳴り響く。
「まだ行けるんだがな」と小さく呟いた幸成は流れ出る汗を拭き取った。
「余裕だな」
ロイは幸成にスポーツドリンクを投げて寄越し、幸成はそれを一気に飲み干す。
５００ｍｌのスポーツドリンクはあっという間に空のペットボトルに変わった。
「沢山飲むんだね。足りなかったら有るよ？」
菜月は水筒を差し出すが、幸成は首を振る。
他の大きなお友達は幸成に嫉妬の眼差しを見せ、他の女子も菜月が断られた事で各所でガッツポーズを見せた。
「幸成君は凄いです。まだ行けそうですね？」
「正直、まだ余裕です」
幸成は笑うと、最後の種目であるハンドボール投げが行われた……

「あ～、疲れたぁ！！」
ロイは屋上で青空を見上げて叫び、サンドイッチを口に運ぶ。
「疲れてるな、ロイ」
「お前は疲れなさ過ぎだ」
ロイは人差し指を幸成に突き付け、サンドイッチを食らう。
「そう言えば、忘れていたな」
幸成は胸ポケットから鳳寿の学生証を取り出した。
「返して来る」
「そうですね。持ち主の方も困っているかもしれませんからね」
沙耶那は弁当箱の蓋を閉めると、手ぬぐいで口を拭く。
「悪い、ロイ！ゴミを捨ててくれ！」
幸成は結んだパンの袋をロイに投げて、階段を駆け降りて行った。
その背中を見送った沙耶那と菜月は今までに見ない張り切りように、目を白黒させる。
「何であんなに張り切ってるのですか？」
「……さぁね」
ロイはいかにも知らないという口調で二人に呟くと、幸成の駆けて行った階段を一瞥した。
「幸成君は今朝の人が好みという事ですか？」
「それは違うと思うぜ、沙耶那さん」
「確かに変態さんみたいに誰彼構わずって、訳じゃなさそうだからね」
「うっせぇよ！！この小学生！」
「しょ……屈辱だ！！抗議をを申し立てるっ！！」
腕をちぎれんばかりに振る菜月はまさに小学生だった……

2―5：コンタクト

屋上を下りてすぐ、教室棟の四階である一年生の教室だ。
一年生は先程の幸成の体力テストの結果で持ち切りだった。
そこに幸成が来れば盛り上がりが最高潮に達するのは必然。
C組に向かう幸成に気付いた女子は教室から顔を出して黄色い声を上げる。
無論、幸成は何を騒いでいるのか分かっていない。
幸成は髪を掻き上げるとC組に入った。
言うまでもなく、とんでもない歓声が上がり、幸成は困惑した表情になる。
「直江先輩、あんたに話があるんじゃない？」という声が聞こえてきた。
本人に自覚有りか？
幸成は話が早いと小声で呟くと「ここに……」と切り出した。
「はい！！」
幸成が言うより早く手を上げたのは目的の人ではなく、今時のギャルといった感じの女性だ。
幸成は困ったように苦笑いを浮かべると「ここに鳳寿って人いるはずなんだが……」という声に周囲がざわつき、手を挙げた少女は笑みをゆっくりと消して手を下げていく。
「神宮寺ならそこに……」と人だかりを指差すと同時に人だかりが割れる。
その先にはこちらに見向きもせず、頬杖を付き、ただ外を眺めている鳳寿の姿があった。
鳳寿は世の中を悲観するような、或いは何かを諦めたような目で外を眺めている。
暗い影を落としている鳳寿に幸成は歩み寄ると学生証を差し出す。
「朝にぶつかったよね？その時に落としたよ。学年を調べる為に中

を見させてもらいました」
「……」
鳳寿は幸成を見向きもせずに外を眺めている。
苦笑いを浮かべた幸成は困ったように後ろ髪を掻くと机の上に学生証を乗せた。
「ここに置くからね」
「……ん……」
鳳寿は短く答える。
暗い、暗過ぎる……
幸成は困ったように監視対象者である鳳寿を見る。
幸成にとって監視対象者と親しくなる事が任務で有り、今回の接触はまたとない機会であった。
が、しかしこのような事態になるとは……
「じゃ、行くね」
接触失敗、と考えるに相応しい結果だろう。
が、不意に幸成はある事実を思い出した。
「そうそう。明日、祭りが開かれると聞いたんだけど、一緒に行かないかな?」
我ながら、ロイみたいに必死だ。
馴れない台詞を言った事で全身が粟立ち、軽く身震いする。
あの馬鹿はこれ以上の事をよくもまぁ、恥じらいも無く言えるものだと感心してしまう。
幸成が顔を引き攣らせていると窓を見ていた鳳寿がこちらを一瞥した。
すぐに窓に目を戻したが、小さな声で「……ん」とだけ答える。
「ありがとう」
祭りの存在を教えてくれた沙耶那への感謝の気持ちと今日の運の良さに感謝だ。
幸成は教室の出口に向かいながら、嬉しさを隠したその時、裾を掴まれ、幸成は歩みを止めた。

軽く一瞥すると、後ろには先程、手を挙げた少女がこちらを見上げている。
不安そうにこちらを見上げている少女は「手紙の返事は？」と問い掛けた。
「手紙？」
そこまできて、初めて幸成は貰った手紙の一人が1年C組だったことを思い出す。
確か米山麗奈とか言ったか？
「悪いが付き合うつもりは無いんだ。ゴメン」
あっさりと一言で返した幸成は我ながら酷いなと内心呟く。
しかし、少女の返答はある意味で幸成よりも残酷だった。
「は？私よりもあのブスを選ぶ訳？」
その一言に幸成は眉を潜める。
何様だ、コイツ……
人をブス呼ばわりするこの少女は、女性絡みに疎い幸成の目から見てもそれなりに可愛い部類には入るだろう。
だが、白黒ハッキリ付けるなら彼女よりも鳳寿の方が可愛いと、幸成は思った。
そもそも、本人を目の前にそういう心ない事を言う時点で人として問題外である。
「最低だな……」
幸成は小さく呟くと、思わずヘクセに向ける時のような冷酷な視線を向けた。
仮にコイツがヘクセだったら、幸成は問答無用で撃ち殺していただろう。
そこまでに、幸成はこの少女に殺意にも似た感情を抱いていた。
幸成はすぐに前を向くと教室を出て行く。
早足で三人が待つ屋上に向かう幸成のその後ろではヒステリックに喚き散らす少女の声が響き渡り、その一言に幸成は歩みを止めた。
ヒステリックだけだったら別段相手にするつもりは無いが、混じっ

て聞こえた一言が問題だったのだ。
「ブス！！放課後、いつもの場所に来いよ」
幸成は舌打ちしたその時、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。
確実にヤバイ……
しかも俺の一言のせいで……
幸成は自分の任務を優先した軽率な行動を恨む。
拳を強く握り、引き返そうと後ろを振り返ったその時、ロイ達の姿が見えた。
「幸成、どうした？もう昼休み終わるぞ？」
「……ああ」
幸成は拳を緩めると足早に三人に駆けて行く。
「どうしたの、ユキ君。顔が引き攣ってるけど？」
菜月は幸成の顔を覗き込むと、首を傾げる。
いつもだったらこのような動作に頬を緩ませるが、今はそんな気になれない。
「幸成君、どうかしましたか？具合でも……」
「いや、大丈夫だよ。何とも無い」
幸成は笑みを作ると否定する。
責任は俺が取らなければならない。
幸成は緩めた拳をにぎりしめると自分の教室に歩いて行った……

2―6：責任

一日の日程が終わりホームルームが終わって、担任教師が出て行ったのを確認した米山麗奈は外を眺めている鳳寿に歩み寄った。
麗奈の目は冷たく鳳寿を見下ろし、顎でしゃくる。
鳳寿は無言で立ち上がると麗奈の後ろを歩いていった……

「幸成、帰るぞ」
ロイは幸成に笑いかける肩に腕を廻すが、幸成はその腕を払いながら立ち上がる。
「悪い、ちょっと忘れ物したから先に帰ってくれ」
幸成はそう言うと、カバンを片手に教室から飛び出して行った。
「ロイ君、幸成君はどうしましたか？」
「さぁ？何か忘れ物したとかで……教科書とかは机の中だってのに……」
「どうしたんでしょうか？」
「そんな事より沙耶那さん！私と一緒に恋という忘れ物を探しに行きませんか？」
「え～っと……ごめんなさいね」
沙耶那に当たって砕けたロイは呆然としていた。
「私は明日の祭りの事で校長先生にお話が、ナツも園芸部の仕事が有りますから……それにしても幸成君はどうしたのでしょうか？」
沙耶那は小首を傾げた……

飛び交う罵声と体にかけられる水。
ただ、濡れてそれに耐えるだけ……
ただ、それに耐えていればいい……
奴らが気が済むまでただ耐えればいい……
鳳寿は手首を針金で縛られて、まるで捨てられた人形のように転がされていた。
麗奈とその他に髪を茶髪に染めた男やいかにも不良といった男達五人が蛇口に付けたホースで鳳寿に水をかける。
「美少女が可哀相じゃん」
「美少女にこういう事するのって良いよな！そそられる」
「美少女、美少女ってブスじゃん」
麗奈は煙草を口に運ぶと紫煙を吐き出す。
このような所を見られれば停学、悪くて退学だがここは人通りの無い学校の奥のトイレだ。
昔、ここで煙草を吸う生徒がいた為、人気の無いこのトイレは鍵が掛けられている。
しかし、針金でも簡単に開く鍵の為、このように使われていた。
鳳寿は濡れた顔を無表情に、横たわっている。
ただ何かに悲観したように……
「何だよ、その目は？あぁん！？」
鳳寿の腹に蹴りが叩き込まれ、鈍痛に顔を歪める。
口が切れて、撒き散らされた水が染みる。
口から垂れてきた血が水に混じり、赤ではなく、茶色に変色した。
「おい。コイツ、ヤっちまわねぇか？」
「いいねぇ」
男達は下卑た笑みを見せるとベルトに手を掛けた。
……アタシ、今から犯されるんだ……

ただその認識だけをした鳳寿はただ水浸しになった床を見つめる。
ただ耐えるだけ……
男が鳳寿のセーラー服に手を伸ばそうとしたその時だった。
「そこら辺にしとけ」

「そこら辺にしとけ」
五人の男と麗奈が振り返ると、そこにはカバンを肩に担ぎ、壁に寄り掛かっている幸成はネクタイを緩めながら片目を閉じて、赤眼ーーーカラーコンタクトで隠しているがーーーで男を睨む。
「あぁ？お前、誰だよ？」
「あれだろ？王子様だろ？」
「白馬の王子様ってか？ギャハハ！！」
「馬鹿らしいよな。王子様とかハーレムとか……ハッキリ言ってうぜぇと思ってるぜ？」
幸成はカバンを放り投げると、ネクタイを解いた。
「だけど、テメェらみてぇなクズはもっと嫌いだ」
「ふざけんな、ガキが！！」
男は怒鳴り、幸成に拳を振るうが幸成はそれを受け止め、思い切り握る。
男は怒鳴りの代わりに悲鳴を上げ、掴まれた指の骨が軋む。
「喧嘩ってのは相手を見極めてやるもんだぜ？」
幸成は耳元で囁くと悲鳴を上げる男の頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。
悲鳴を上げる男を一瞥すると、口元を歪ませた。
「次は誰だ？」
「なめやがって！！」
今度は二人が幸成に駆け寄って来た。

幸成はリーチの長い足で、男の一人の顔面に回し蹴りを叩き込んだ。
男は鼻血を噴き出すと濡れた地面に卒倒する。
続けてその反動を利用した右フックがもう一人を弾き飛ばす。
半目になると笑う。
「おいおい？また立ってくるとかないのかよ？二人でこれじゃ、まだ泣きながら腕を振り回すガキの方が強いぞ？」
幸成が嘯いたその時、最初に倒した男が幸成を羽交い締めにする。
この機を逃さんとばかりに駆け寄る男がギリギリまで迫った刹那、幸成は壁を蹴る要領で、迫った男の腹を蹴って宙返りし、羽交い締めから逃れ、羽交い締めしていた男の後ろを取る。
男が慌てて振り返るが、それと同時に幸成のアッパーカットが顎に決まり、吹き飛ばされた男はもう一人を巻き込みながら床に転がった。
「いい加減に気付けよ。お前達は俺には勝てない」
１０歳の時に三村に拾われて、自衛隊の訓練受けて、今は吸血鬼を相手にしてんだ、年期が違うよ。
幸成は内心笑うと目配せをして行けと促す。
それと同時に無傷の男は気絶した男に肩を貸すと慌てて立ち去り、その後ろを残りの男達が着いて行く。
取り残された麗奈を見下ろした幸成は深い嘆息を漏らした。
「……このやり口からいって常習犯なんだろ？いい加減こんな馬鹿らしい事はやめておけ」
幸成が言い終わるより早く、麗奈は鋏を取り出し、刃を開きながら幸成に切り掛かる。
今の若い人はキレやすい等と聞いた事があるが、まさか刃物まで持ち出すとは想定外の事態だった。
しかも少女が……
幸成の脇腹に鋭い痛みが走るが、ＨＡＷＫにおいては日常茶飯事。
その馴れた痛みに顔を歪めると、ニッと笑った。
「馬鹿な事をしてるな！」

幸成は怒鳴ると麗奈の手に手を掛けながら鋏を引き抜いた。
血濡れの鋏を片手に、無表情で駆けて行った麗奈の背中を見送ると、幸成は腹に手を当てる。
日常茶飯事とは言えども痛いものは痛い。
貴方も殺して私も死ぬ……
そんな事にならなければ良いがと幸成は溢れ出る血を右手で押さえると苦笑いを浮かべる。
（死のうとしても簡単には死ねないからなぁ……）
それが彼の特異体質とでも言うべき事であり、この年齢で自衛隊の特殊訓練を受けてＨＡＷＫに抜擢された理由であるから、利点ではあるが、血生臭い事はここまで来て御免である。
幸成は腹から溢れる血を押さえながら床に倒れている鳳寿に歩み寄った。
「……大丈夫か？」
「……ん……」
鳳寿の縛られた針金を解くと、手を差し出した。
「立てるか？」
「……ん……」
鳳寿は短く答えると、幸成の手を握り返した。
「……何故来た……？」
初めての鳳寿の問い掛けに幸成は驚いたように目を見開いた。
「ああ、祭りに誘っておきながら待ち合わせ場所とか伝えてなかったから、伝えに来た……明日、９時に三神神社でいいよな？」
「……うん……」
鳳寿はそれを聞くと、無表情だがハッキリと答え、びしょ濡れのセーラー服のままトイレから出て行き、幸成は苦笑いを浮かべながらその背中を見送った……

2―7：痛苦

夕日に向かって鳴く烏。
これほど虚しい事は有るだろうか？
脇腹は傷が塞がったが、まだ疼く。
流石に回復力は高くても痛覚という物は残っている為、疼くという訳だ。
「畜生……女の方が露骨にえげつないぜ」
幸成は血で濡れたブレザーとワイシャツ姿で歩いて行く。
人目に触れる学校の裏門から出た。
「あれ？ユキ君、どうしたの？」
その声に振り返った幸成の目に、八重歯を覗かせて笑っている菜月が映った。
菜月の手にはジョウロがあり、近くには花壇がある。
「酷いね？どうしたの？ブレザーとかワイシャツが血で濡れたようになってるよ？」
「あ～……」
久しぶりに返答に困る質問だ。
そう言えば、自動販売機にトマトジュースが売っていたような……
「さっきトマトジュース飲んでたら噎せて、零してしまって……」
「見掛けによらずユキ君はドジだね」
菜月は笑うと花を見て、水をかける。
花はまだ芽が出ていない。
「その花は？」
「アクイレギア・ブルガリス。キンポウゲ科オダマキ属の花」
「詳しいね。花が好きなんだね」
「うん。花は……植物は嘘をつかないから」
その一言に幸成は菜月を凝視する。
菜月は何処か淋しそうで、今の彼女はロイに毒舌を吐く彼女とは違

う。
何時もなら小学生と見紛うが、今は小学生にも高校生にも見えない。
哀愁の漂う女性の、独特の色香を醸し出していた。
「植物は注いだ愛情の分だけ答えてくれる。信用を裏切らない。私利私欲に走る人間とは違うね」
信用を勝ち取る為には平気で嘘をつくエージェントやスパイ。
まるで自分の事を言われているようだった……
いや、見透かされていた？
「ところで明日のお祭り、待ち合わせますか？」
「あれ？何？誘ってる？」
「いや、別にそういう訳じゃ……」
「きゃ～！男は狼だ～！！」
頬に手を当て、身をもじもじと動かす。
狼の単語に幸成は顔を引き攣らせた。
こうも連続で心臓に悪い単語を出されると幸成も気が気ではない。
「焦ってるの？可愛い……」
可愛いと、しかも小学生のような可愛い女の子に言われたのは初めてで、自嘲してしまうのは必至……
「そうか……」
「釣れないなぁ！で、そっちの都合は？」
「こっちは鳳寿さんと9時に沙耶那さんの神社で待ち合わせてます。そこに合流するという形に出来ませんか？」
「鳳寿さんって、神宮寺家財閥のお嬢様の？」
「はい」
「もしかして玉の輿狙い？」
「違いますから。ぶつかったから、そのお詫びに！！」
「分かってるよ！やだなぁ、本気にしちゃって」
菜月はのほほんと手を振り、花の葉を撫でながら優しく微笑んだ……

「ふざけやがって！！」
男の怒鳴り声が響き渡り、鉄パイプの音が古い教会に轟く。
今だに癒えぬ傷からは血が垂れてくる。
「直江とか言ったか？あの新参者！」
「麗奈、テメェが鳳寿に一泡吹かせたいって言ったからだぞ」
「何よ！私が悪い訳！？」
「人刺して何言ってんだよ！」
男は煙草を吹かしている麗奈に怒鳴り、麗奈は気まずそうに目を逸らす。
その時……
「妾達のテリトリーで内輪揉めとはなんと低脳な」
その声に、幸成に叩きのめされた五人と麗奈は古いステンドグラスを見上げた。
六人の目に梁の上に座る金髪のロングヘアを靡かせた妖艶な女性が映る。
女性は赤いゴシックドレスに身を包み、手を口に当てて優雅な笑みを浮かべていた。
「誰だよ、おばさん！！」
その一言に女性は梁から降り、歪んだ笑みを見せた。
「シュトレイゴイカバールの痛苦のミラルダにおばさんとは失礼ね、下等生物が！！」
女性は穏やかではない叫び声をあげると、右手を掲げた。
同時に六人は悍ましい物を見て悲鳴をあげる。
誰もが嫌悪を示す「それ」は六人の体を一気に包み込み、確実に喰らっていく。
悲鳴と断末魔を、心地の良いクラシックかオーケストラのように聞く女性の目に映るは自分の僕達……

その光景は傷を負った牛が血の匂いで凶暴化したピラニア・ナッテリーに襲われる様子に似ていた。
瞬く間に皮膚を食い破り、内臓を食い破り、心臓を食いつぶす。
普通の人なら直視出来ない光景を眺め、興奮したように頬を朱に染めるこの女性は明らかに異常であった。
僅か３０秒の時間でその場に残ったのは、先程まで生きていたとは思えない、深紅の血液に濡れた六つの人骨だけだ。
その光景を見た女性は教会に響き渡る狂笑を口から発したのだった……

２－８：謝礼

３０分程菜月と世間話をし、２０分の通学路を歩き、帰路に着く幸成。
幸成は夕と夜が混ざり合い、赤黒い色を映し出している空を見上げて溜息を付く。
もし、自分に普通に親がいたら、沙耶那や菜月、鳳寿のように――鳳寿は孤立しているが――普通に学校の生活を楽しめていたのだろうか？
１０歳の時にヘクセと関わって三村に拾われてから人生が変わったのは分からないし、関わってなかったら逆に最悪の人生だったかもしれない。
その時には名前すら無かったし、帰る家も無かった。
喋る言葉も無かったし、書く言葉も有りはしなかった。
それを三村が拾ってくれて、今の自分が有る。
自衛隊の訓練は辛かったし、勉強もやりたくはなかったが居場所が有ると思えばこそ成し遂げられた。
１６歳の時にＨＡＷＫに配属されてからは毎日ヘクセを狩って……
もしかしたら、今回の事態は運が良かったのかもしれない。
学校という場が与えられたのだから……
幸成が空から目線を外し、雫荘を見た。
と、そこには黒塗りのバンがある。
見たことが無いその車から出て来たのは黒のスーツにサングラスを付けた男だ。
手にはアタッシュケース。
仮にこの男がシュトレイゴイカバールの所属だとしたらアタッシュケースには可能性としてＭＰ－５Ｋが納められているだろう。
ＭＰ－５ＫのＫは「ｋｕｒｚ（クルツ）」、ドイツ語で短いを意味し、「Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ社」を代表するサブマシンガン「ＭＰ－５」シリーズの

小型にした銃だ。
ＭＰ－５Ｋは小型であり、専用のアタッシュケースに入れればそのまま運用する事も可能だ。
見知らぬ男がアタッシュケース、そしてシュトレイゴイカバールのヘクセと交戦した時に見た白狐……
白狐がシュトレイゴイカバールに仇成す者の監視をしていたヘクセだとしたら、つじつまが合う……
「直江幸成君だね？」
男は笑みを浮かべて歩み寄ってくる。
アタッシュケースに入れたＭＰ－５Ｋは狙い難い為、近距離で使うのが普通だ。
調度、このように近寄って必中射程に入ったら持ち手に付いた引き金を引けば……
いくら幸成でも近距離で、多数の弾丸を撃ち込まれて生きていられる自信は無い。
幸成が唾を飲み下したその時、男がアタッシュケースを持ち上げて開いた。
そのアタッシュケースの中には札束が詰まっている。
それも諭吉である。
ザッと１００万以上あるだろう。
取り越し苦労よりもこの諭吉の束に幸成は激しく狼狽する。
「なっ……はぁ！？」
「龍一郎様の御命令です。鳳寿様を助けて頂いた御礼の５００万円です。どうか、お受け取り下さい」
「いや……は？えぇ！？」
龍一郎……
確か神宮寺財閥の当主の名前だ。
てか、御礼に５００万円ってスケールでか過ぎだろ、神宮寺財閥！！
「あの……流石にお受け取りは……」
「しかし、主は是非、鳳寿様に良くして下さった幸成様に受け取っ

て欲しいとおっしゃっています」
部隊の資金には調度良いというのが本音である。
（そもそもＨＡＷＫの予算の倍以上どころか、完全に凌駕してやがる……）
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ社の狙撃銃「ＳＬ－８」のサプレッサー標準装備モデルの「ＳＬ－９ＳＤ」や同じく同社のサブマシンガン「ＭＰ－５ＳＤ６」を購入すれば武装が大幅アップとなる。
もっとも、対ヘクセ用拳銃「スコトス＆フォース」も敵に対して、流体性力学的ショック、簡単に言うと体内の神経を伝播し、対象に即死並の威力を与える攻撃力を持っているのだが、要はリスクの問題だ。
流石にガン＝カタ宜しく二丁拳銃を接射で叩き込むのはリスクが高い。
目の前の大金を前に幸成は心が揺らぎそうになるが幸成は首を振る。
「流石に受け取れません。それに俺の一存で貰う訳にもいきません」
「なら親御さんにお話をしましょう」
そう言うと、男は雫荘の一室に歩いていく。
（しかし、まずいな）
目立つなと言われて目立ちまくりだ。
オマケに監視対象者の方からまさかの資金提供。
失態か、幸運かは別にして色々まずい。
半ば諦めたように幸成は頭を掻くと、男はドアをノックし、数秒して三村が顔を出す。
ブレザーに血が付いた幸成とアタッシュケースを持った男に、やはりと言うべきか、三村も同じ結論に達して身構えるが、男もそれより早く口を開く。
「神宮寺財閥の者です。幸成君の保護者様で間違い有りませんね？」
「え、えぇ……」
三村は何をやらかした、と目で訴えている。
（そりゃそうなるわな）

幸成は自嘲すると歩み寄る。
「お嬢様である鳳寿様を助けて頂いた御礼でございます」
その声と同時に開けられたアタッシュケースを見た三村は間抜けに口を開けて、何が何だか分からないといった風に５００枚の諭吉と男を交互に見る。
「あの……はい！？」
誰だって動揺する額だ。
想像してほしい。
女の子を助けて、満身創痍で帰ったら５００万円が家にある。
ハッキリ言って現実味が無さ過ぎて今の状況すら把握出来ないだろう。
正直、まだヘクセの方が現実味がある。
「ほんの御礼です。どうぞ、お受け取り下さい」
「流石に無理です！！」
三村はアタッシュケースを突き返すと男は笑みを浮かべた。
「流石、鳳寿様を御救い下さった方のお父様だ。ですが、せめて５０万円だけでも受けとって下さい」
諭吉が５０枚でも相当だぞ、と突っ込みたい衝動を抑えていると三村は「５０万なら」と受け取った。
（可笑しいだろ！！）
幸成は驚くと男は「ありがとうございます。これで私もお叱りを受けずに済みます」と笑い、アタッシュケースを閉めた。
そして男は三村に一礼すると車に乗り込んだ。
黒塗りのバンを呆然と見送る幸成は車の影が小さくなったのを確認して、三村を見た。
「おっちゃん！！可笑しいって！！」
「流石に受け取りたくなかったが、少しは受け取らないとお兄さんが気の毒だろう」
一理あるが、少しが５０万だと！？
幸成が内心叫んだその時、三村の太い腕が幸成の頭を鷲掴みにした。

「それより、聞きたい事があるんだ。幸成君」
三村は笑顔で言うと凄まじい力で幸成を中に引きずり込んだのだった……

２－９：被害者

中に引きずり込まれた幸成が三村に事情を話し終えると深い嘆息を漏らした。
事情が事情であったし、むしろ信用を勝ち取れた可能性がある。
が、しかし、殺傷沙汰ーーー幸成はぴんぴんしているがーーーであるのもまた事実。
停学は確実、退学の可能性も十分有り得る。
「最悪だ……」
三村は頭を抱えると頭を掻いた。
「過ぎた事をクヨクヨ言っても……」
「仕方ないが、転校二日目でやらかしやがって……」
幸成の最後の一言を遮り、三村は再び深い嘆息を漏らした。
その時、ドアが開く音が響き渡り、「大丈夫じゃないですかぁ？」と彩花が入って来る。
「立ち聞きさせてもらいましたけどぉ、その心配は無いと思いますよぉ」
彩花はそう言うと部屋に上がり込んだ。
「だってぇ、相手はリンチをしたうえにぃ、犯そうとしたんですよぉ？それを考えたらぁ、そいつらが密告する可能性は無いと言えますぅ。それに幸成も刺されてますからぁ、間違いなく非はあちらですよぉ？」
確かにその通りだったが、奴らが密告したとして、果たして本当の事を言うだろうか？
そもそもこちらも手を出している為、正当防衛が適用されるかさえ怪しい。
「まぁ、その時にならなきゃ分からんだろう」
「そうですねぇ。そういえば貰った５００万円は何処ですかぁ？一人１００万円の山分けで調度良いですからぁ……」

やはりこの人は金が目当てだったか……
「５０万円しか貰ってないから……」
「丸が一つ少なくなっても十分ですよぉ？貰えるお金は貰いますぅ」
「いや、これは防衛省にしっかり報告して、今後どう扱うか検討する必要がある。下手をすりゃ賄賂に成り兼ねないからな」
「えええ！？別にあちらが気持ちと言っているんだからいいじゃないですかぁ！」
彩花はいかにも不満です、と主張しながら頬を膨らませる。
三村の対応は当然なのだから仕方ないが、またとない資金調達の機会であり、逃すのは勿体ない。
上手く、優にやらせれば改造武器が新たに作られるのだから……
「勿体ないですよぉ？」
「とにかく、今は防衛省に掛け合ってみる。勿論、直に、だ。下手をすりゃエシュロンに探知されて、米軍がでしゃばって来るかもしれないからな」
エシュロンとは簡単に言えばアメリカのＮＳＡが保有する、電話やメール、インターネットを監視する大規模な盗聴器なるものだと思って欲しい。
日本には無いと言われているものの、どこまで信用出来るか疑われる。
今回の事で揚げ足を取られたらそれこそ面倒だ。
「という訳で、俺は今から防衛省に向かう。四人はしっかりとヘクセの監視をするように！！」
三村本人も、やはりこの５０万円が欲しいらしい。
流石、貧乏部隊と幸成は笑った……

長い石段に並ぶ桜並木。
まだ芽しか出ていないこの木も春が本番になったら綺麗な花を咲かせ、薄い桃色の花びらを風に舞わせるだろう。
その石段には紅白の提灯が並び、明日にはお祭りが始まるのだと告げる。
沙耶那は最後の調整に見回りをしていた。
不備が有ったら申し訳が立たない上、楽しみにしている人達の期待を裏切る事になる。
その最後の見回りを行っている沙耶那の姿は典型的な巫女服で、巫女さん属性を持っている人は狂喜乱舞してしまう程に映えた。
明日の舞の練習も終わり、これが終われば、今日は何も無い。
昨日の夜は家の仕事の為に外出禁止令を破って外に出たが、今日はそれが無いのが嬉しい限りだ。
「明日が本番……凄く楽しみ」
沙耶那は微かに笑うと空を見上げた……

三村が防衛省に出向いている間、幸成達、ＨＡＷＫ隊員にもう一つ事件が発生していた。
「「ＧＡＲＵＤＡが使えない！？」」
幸成と優は同時にロイに迫ると、ロイは「落ち着け」と弁明する。
「そもそも偵察衛星が同じ場所に留まると思ってるのか！？」
「違うんですかぁ？」
彩花は食後の紅茶を啜ると片目を開けてロイを見る。
ロイはやれやれと金髪の髪を靡かせながら首を振った。
「偵察衛星は低軌道を取って、一日一回から数回、同じ時間に同じ場所に現れる。その時間に固定しないと使うタイミング逃す。使用

出来る時間は１９時から２４時の間。つまり、まだ使えないんだよ！！」
ロイは時計を差す。
時計は１８時を半分回った程度だ。
「しかも、華景市の上空にいない場合は米軍の管理下に置かれて使用出来ないと契約書に書かれていただろう」
ロイの一言に三人は華景市に行く前に書かされた契約書の一文を思い出してそれぞれ納得する。
本当に特殊部隊の面子かと疑うが、改めて申し上げるが彼らは「その道」のエキスパートだ。
あくまで「その道」のであるが……
「という事は、その監視タイミングをシュトレイゴイカバールにバレたら悲惨じゃないか」
優の一言にロイは「だから言いたくなかったんだ」と苛立ち混じりに呟く。
「考えて見ろ！仮にここに盗聴器が有ったらさっきの情報が筒抜けだ。ここに来て俺達しか出入りしてないから良い物を……」
確かにロイの言う通りだ。
偵察衛星の監視時間は一定である為、その監視時間を避けて行動すれば空からの目をかい潜れる。
つまり、偵察衛星が形骸化しかねないという事だ。
「それで思い出したんだがロイ。昨日の衛星の写真を頼む」
「どうかしたの？」
「コイツが都市伝説の白狐を見たんだと」
「白狐ですかぁ？」
「ああ。ヘクセを追跡中に偶然確認した。路地裏だったから衛星で確認出来てるかは分からないけど……」
「それを今から確認すればいいだろ？」
ロイは嘯くとパソコンのキーボードを叩き、昨日の衛星の録画映像を出す。

録画映像は青で彩られ、幸成達は赤で、熱を発する移動物は白で映し出され、肝心のヘクセは緑で移される。
「何処で見たんだっけ？」
「ワイヤーでの移動中」
「ワイヤーでの移動中っと……これだ」
ロイは手早く映し出すが青く染められた路地裏には何も映っていない。
「何も映ってねぇぞ？」
「確かに見たんだが……」
幸成は小首を傾げると何も映っていないＨＳＶの映像を凝視した。
「まぁ、そのうち分かるんじゃない？」
優は楽観的に笑うとテレビを付けた。
「おいおい、任務中にテレビを見るな……」
幸成が諌めたその時、テレビの向こう側で血相を変えた女性キャスターがマイクに言葉を吹き込んでいた。
（先程、山林で見付かった六人の死体の身元が判明しました。死体は華景高校の生徒で米山麗奈さんと……）
「嘘だろ！？」
「どうかしましたかぁ？」
「コイツらだよ！！例の六人！」
幸成は映し出された六人の写真を見て怒鳴る。
その六人は間違いなく米山麗奈とあの男達五人組だ。
狐につままれたような顔の幸成は「何で……」と呟く。
仮にヘクセだとしたら複数か？
ヘクセは襲う相手の前提として、血を吸う相手が異性である場合が多い。
これは実際の吸血鬼伝承にも多く見られる事だ。
また、血を吸う事で、血を吸われた相手は性的快感を得る。
これも吸血鬼伝承に見られる事だ。
つまり、卑猥ではあるが結論から言うと吸血鬼の吸血というのは人

間で言うところの性交である。
ディック・チャンバーの時も、首に歯を突き立てて飲むのではなく、刃に付いた物を舐め取る程度であったのは記憶に新しい。
男のヘクセは女性を、女のヘクセは男性を襲うのが普通なのだが……
「恐らく逆鱗に触れたんでしょうかねぇ？可能性としてはヘクセが複数かぁ、ブチ切れられたとしか考えられませんからねぇ」
彩花は人事のように呟くと紅茶を啜る。
逆鱗に触れたとなれば、話は早い。
（たった今情報が入りました！死体は白骨化していたと警察から発表がありました！）
血を吸われて縮んでも白骨化する事は有り得ない。
「やはりですかぁ。言ってしまえば想定の範囲内ですねぇ」
彩花はそう言うと、テレビのチャンネルをニュースからドキュメンタリーへと変えた……

第3話

3－1：祭り（前書き）

3－1：祭り

春風が吹く華景市はいつも以上に賑わっていた。
祭りというだけに多くの人達が華景市に訪れている。
「何を着ればいいかな……」
幸成は布団の上に並べられた私服の数は非常に少ない。
（無難にワイシャツとズボンという出で立ちでいいかな？）
単にブレザーが無い学生服だと突っ込むのは無しだ。
幸成はワイシャツにネクタイを緩めに締める。
「まぁ……大丈夫だろ」
幸成は笑うと財布と携帯電話をポケットに仕舞うとドアを開けた。
目的は鳳寿の信用を勝ち取る事と沙耶那、菜月の素性を正確に洗う事だ。
鳳寿の信用を勝ち取り、神宮寺財閥の事を聞き出すのが目的だが、沙耶那と菜月の素性は知っておきたい。
沙耶那と菜月は親しいようで実際の所は何も分かっていないのだ。
沙耶那は三神神社の娘、菜月は華景高校の園芸部、知っているのはその程度であり、情報と言える情報ではない。
この機会に何らかの情報を掴み、何らかの形で使えるように、要は協力出来るように出来れば最高だ。
幸成はドアノブを掴むと大きく深呼吸をした。
「Ｔａｋｅ　ｔｈｅ　ｆｉｅｌｄ！！（出動だ）」

「お父様、舞踊の為の禊は終わりました」
白い小袖に緋袴の装束の沙耶那は笑顔で父親の三神翼（みかみつばさ）に笑いかける。

「あ～」
翼はやる気ない返事で答えた。
彼にとって、寝ると食べると娘が唯一、やる気が出る話題だ。
祭りの事は彼にはやる気が出ない話題の一つである。
毎年、準備をして色々と大変であり、無気力な彼には苦痛以外の何物でもない。
ただし、娘である沙耶那の舞踊は別である。
「あなた？もっとやる気を出して上げて下さい」
「それなりに、な」
それを諌めたのは沙耶那の母親の三神望（みかみ のぞみ）は腕を組み、子供のように頬を膨らませた。
父親の翼は切れ長の瞳に端正な顔立ち、母親は可愛い端麗な顔立ち、そんな美男美女のカップルから生まれたのが沙耶那のような女の子だというのが頷ける。
「お母様、今日は良い天気ですね。お祭りには良い日和でございます」
「そうですね。とっても良い日和ですね、沙耶那」
望は優しく微笑むと空を仰ぎ見た。
参拝客の姿はちらほら見え、祭りが始まるのだと告げている。
「今日を楽しい日にしましょうね、沙耶那」
望は娘の沙耶那に優しく微笑み、沙耶那も微笑みを返した……

つくづく、自分はオシャレに向いていないな、と苦笑する幸成は三神神社に歩いていた。
多くの参拝客しかり見物客で狭い道が人で埋め尽くされている。
（予想以上に人が多いな）

三神神社から雫荘までは地図から見る限り、徒歩で約１０分程度の距離だがこの人混みでは少し掛かりそうだ。
「ユキく～ん！！」
幸成を呼ぶ、元気な呼び声に気付き、向こう側から駆けて来る菜月を見付けた。
菜月はオシャレなフリルの付いた白いワンピースを着ている。
「……可愛いな……」と言って、幸成はポーチだと思っていた紐を見て、水筒だと知り、吹き出した。
「小学生の遠足か！？」
「何か言った～？」
菜月は上目で幸成を見上げる。
いたいけな様子の菜月の可愛い仕草に幸成は頬を緩ませた。
「わざわざ向かえに来てくれてありがとうって言ったんです」
幸成は菜月の頭を優しく撫でた。
故意というよりは無意識といった感じで、菜月が小学生のような風貌だったからという事もあっただろう。
頭を撫でられた菜月は狼狽しながらも、主人に甘える猫のように気持ち良さそうに甘える。
「菜月＝猫」の式が今、幸成の中で成り立った。
「ほぇえ～、ユキ君の撫で撫で、とっても気持ち良いよ～」
うっとりと目を細める菜月は愛嬌のある声で幸成にじゃれつく。
不意に冷静になって気付くと周りの視線が突き刺さり、幸成は頭を撫でるのを止めた。
冷静に考えたら幸成が小学生にちょっかいをしているようにしか見えず、事情を知らない人が見たらロリコンやペドフェリアに成り兼ねない。
子供を恋愛対象に見たり、幼女で欲情したら犯罪者、現在の状況では言い逃れは出来ないだろう。
幸成は慌てて手を引っ込めると歩き出した。
「えっ？ちょっとユキ君！何で止めちゃうの！？ねぇ」

菜月も幸成の背中を慌てて追い掛けた……

「チッ！幸成の野郎！三回爆発してエロゲの世界に転生すりゃいいんだ！」
憎らしいと言わんばかりに爪を噛むロイは二回の自室から楽しげに歩く幸成と菜月を双眼鏡で見つめる。
横で見ていた優も小さく呟いた。
「何で小学生と付き合ってるの！？横のロリ……Ｍ１３４で蜂の巣にしてやりたい……」
「なっ！？」
「Ｍ１３４　ミニガン」とは手っ取り早く言えばガトリングである。７．６２×５１ｍｍ　ＮＡＴＯ弾という高威力のライフル弾を使用するその重機関銃は毎分２０００～４０００発で弾丸を発射する為、ヘリコプターはおろか人間なら木っ端みじんだ。
蜂の巣どころの話ではない。
「物騒な事を言うなよ、おっかねぇ」
ロイは軽く震えながら恐怖しつつ、優を見る。
彼女ならやり兼ねないから恐ろしい。
「あらあらぁ、嫉妬は恐いですねぇ？お二人さんは少しは落ち着いて下さいねぇ」
「彩花さん、こんなの見ても胸糞悪いだけですよ」
ロイは頭を掻きながら彩花に言うが、彩花は優雅に紅茶を飲む。
「それは貴方がお相手を見付けられなかっただけですよねぇ？優の方も大好きで仕方ない幸成を誘えなかったからですよねぇ？」
「「それを言われると言い返せない……」」
ロイと優は言い返せない歯痒さに溜息を漏らす。

元よりこの彩花という人物に勝とうという事が無謀である。
「さてさてぇ？望遠レンズも取り付けてしっかり弱みを握りましょうねぇ？」
魔王か、この人は……
二人は抗えない歯痒さと幸成の弱みを握れる絶好の機会を逃さん為に望遠レンズを取り付ける。
ロイが望遠レンズを覗くと、意外にも二人はもう三神神社の石段の手前まで来ていたのだった……

3―2：選択

人混みの中を歩き、三神神社にたどり着いた幸成と菜月の前に黒塗りのバンが止まっていた。
見覚えのあるナンバープレートの車に幸成は歩み寄ると後部座席から白いセーラー服姿の鳳寿が出て来る。
鳳寿は相変わらずの無表情で幸成と合流すると、菜月を一瞥した。
「待ちましたか？」
その問い掛けに鳳寿は首を振る。
正直、拍子抜けしたというのが感想であった。
鳳寿は財閥のお嬢様なのだから何かオシャレな服を着てくると思っていたのだが……
「鳳寿さん。何で学生服？」
「……先輩も……」
そういえばそうだったな……
（それにしたって、貧乏人もとい貧乏部隊の俺はともかくお嬢様の鳳寿がセーラー服か……）
幸成は怪訝な表情で眉を潜めると「あれ？皆、お揃いでお出でですか？」と笑いながら沙耶那が石段を降りてくる。
沙耶那の大振りの胸のせいで神聖な巫女服が目のやり場に困る服装に変わってしまう。
幸成は沙耶那の胸をチラと見ると申し訳なさそうに空を見上げた。
しかし、再び見てしまうのは男の性だろう。
「もう少しで舞踊が始まります。上でゆっくりしていって下さい。上には少しですが露店が並んでいますよ」
「サヤ、わたあめ有った？」
「ええ」
「やった！ちょっと買ってくる！ユキ君、先に行ってるね」
「私も舞踊の準備がありますので先に行きますね」

「分かりました」
二人の背中を見送った幸成は鳳寿を一瞥する。
鳳寿は笑うという事もなく、ただ無表情に俯いていた。
何かふさぎ込んだような鳳寿を一瞥した幸成は笑いかける。
「え～っと、良い天気だね？」
「……ん……」
「傷、大丈夫？」
「……ん……」
「あ～……」
「……無理しなくていい……アタシに関わった人は皆死ぬから……」
鳳寿はそう言うと駐車させていた黒塗りのバンに向かって歩き出した。
それを幸成は腕を掴んで制止するが鳳寿は負けじと怒鳴る。
「何で皆がアタシを避けているか分かるか！？」
「……」
「アタシに関わった人が皆死んでるからだ！！アタシは運命に呪われてるんだ！！」
「何を言って……」
「昨日、アタシにちょっかいを出した奴が死んだし、先輩だって刺された！！アタシに関われば死ぬんだ！アタシは死神だから……」
「……お前、馬鹿じゃねぇの？」
幸成は面倒臭そうに髪を掻き上げる。
「この世に死神なんていねぇよ」
吸血鬼はいるけど……
「あいつらは何かの事件に巻き込まれて死んだ。俺だって昨日刺されても、今日はぴんぴんしてる。お前が死神な訳あるかよ！！」
幸成は大声で怒鳴り返すと周りの参拝客が何事かと凝視した。
しかし、幸成はそれを無視して続ける。
「お前が何でそんなに暗いのかは知らない。だが、お前と関わっても俺は死なない」

お前と関わっても俺は死なないーーーお前と関わっても自分は死なないーーーかつて三村に言われた言葉。
１０歳の時に三村に会った時に言われた言葉だ……
鳳寿は昔の俺みたいに何かを背負ってる。
重い十字架のような何かを……
「一人で抱えるな。俺は死なない。約束するよ」
幸成は俯く鳳寿に優しく笑いかけるとその手を離した。
信用してくれるかは彼女次第だ。
今は任務の為ではない。
彼女の為だ。
彼女が一歩歩み出るか、今のままか、それは彼女次第であり、幸成もした選択肢であった。
どちらを選ぶかは彼女次第だが、前者は何が有るかはは分からない、そして後者は安定しているが今のままだ。
俺は前者を選んだが、彼女は……
幸成は鳳寿を見つめると、鳳寿は車の中に入った。
無理強いではないのだから、彼女の選択にどうこう言うつもりは無い。
ただ残念ではある……
幸成はゆっくりと目を閉じ、髪を掻き上げながら溜息を漏らしたその時だった。
「……先に返って下さい……帰りは徒歩で帰ります」
「しかしっ！！」
「……聞こえなかった？」
鳳寿はそう言うと有無を言わさないといった風に車の扉を閉め、車から出て来た。
拍子抜けし、口をあんぐり開けた幸成に初めて笑って見せる。
「これから何処に行く？先輩？」
「あ～……取り敢えず神社に行こう」
「……うん」

笑えば可愛い、と幸成は鳳寿を見て思う。
二人は黒塗りのバンを見送ると石段を上っていった……

3―3：舞

石段を上り終えた二人は改めて神社の人混みの多さに驚いた。
神社は石段を上った場所が広い空間となっており、そこに屋台や露店が並んでいる。
そして沙耶那の舞踊が行われる場所は広場の奥にある古い建造物だ。
その建造物は一般的な劇場の舞台のような構成で、その隣に本殿となっていた。
その本殿の後ろが沙耶那自宅である。
「人、結構多いな」
「……うん」
こりゃ菜月を探すのも一苦労だな、と思った矢先、幸成の名前を呼ぶ声が聞こえ、人混みを掻き分けてやって来る菜月の姿が見えた。
菜月の手には屋台の戦利品であろう、わたあめやリンゴアメ、シェイクが握られている。
それを抱える姿は殆ど元気な小学生だ。
菜月が合流すると幸成は笑いを堪えて言う。
「随分買ったな。お金、大丈夫か？」
「うん」
菜月は元気良く答えるとわたあめを口に運ぶ。
わたあめを小さな口で精一杯頬張る姿は愛らしく、思わず笑いが零れる。
「そんなに慌てて食べなくてもいいだろ！」
それを聞いた菜月は上目で幸成を見ると、わたあめを食べながら口を開く。
「だって美味しいんだもん！ユキ君も食べる？」
「いや、俺はいらない」
菜月はその答えを聞くと口を尖らせるが、すぐに鳳寿にリンゴアメを差し出した。

「はい。奢りだよ」
「……ありがと……」
鳳寿は躊躇いながらもリンゴアメを受け取り、リンゴアメを舌先で舐める。
同時に鳳寿は目を見開き、「美味しい」と呟く。
「ところで沙耶那さんの舞踊はいつ頃始まるんですか？」
「あと少しかな？」
菜月はわたあめを頬張り、飲み込むといつもの水筒から飲み物を出す。
相変わらず同じスポーツドリンクで幸成は苦笑する。
ましてや、シェイクを買っておきながらそれを飲むかというツッコミもしかり。
幸成達は舞踊が行われる場所まで行くと、間もなくして笛の音が響き渡った。
見物客は一斉に建物に近付き、舞台の上を注目する。
そんな中、幸成は近くにあったパンフレット置場からパンフレットを取り、それを開くとその舞踊の解説を見る。
この舞踊はかつて人々に暴力を振るっていた鬼を退治する白狐の伝説を元にした物だ。
人々に狼藉を働き、沙耶那の先祖の巫女をさらった鬼は華景市の桜を咲かせないように呪いをかけた。
その鬼を退治する為に、華景市の守り神であった白狐が立ち上がり、白狐は鬼と相打ちになりながらも鬼を退治し、巫女を助け出す。
その白狐の死体を燃やした灰を巫女が撒くことで桜の花が咲き、白狐を神として崇め、巫女を「神子（みこ）」として崇めた。
そして、毎年桜が咲くようにと祈願するようになったのがこの祭りである。
（まるで花咲か爺さんだな）
幸成はパンフレットを畳むと始まった舞踊を見た。
横笛の音色と和太鼓の音とともに般若の面を付けた男性が入場して

くる。
般若、つまり女の鬼が刀を振るい、舞を見せた。
激しいその舞は鬼の恐ろしさを醸し出し、刃が太陽に照らされて煌めく。
その様に泣く小さな子供を見ると、秋田のナマハゲがやって来た時の子供の反応を思い出させる。
笛の音と和太鼓の音の調和が佳境に入ったその時、巫女役の沙耶那が綺麗な扇を持ち、舞を踊りながら舞台に入場した。
刀と扇が舞い、巫女が捕らえられる場面が行われる。
鬼は巫女の首に刀を突き付け、沙耶那の後ろに鬼が回り込み、刀を突き付けながら奥に消えていく。
それと同時に白狐の面を付けた女性が現れた。
女性は巫女が連れ去られた事を嘆くと同時に笛の音が響き渡る。
それはまるで狐の鳴き声であるかのように……
狐の鳴き声が響き渡ると般若と沙耶那が現れ、和太鼓の音が響き渡り、テンポが激しくなる。
白狐と般若が刀で舞いながら交差し、演舞が数分行われた。
そして、和太鼓と笛の音色が落ち着くと、般若と白狐が退場し、残された沙耶那が自分を助けてくれた白狐の為に舞を踊る。
舞いはどこか儚げだが、優雅で……
菜月が語った通り、綺麗で美しいその舞いは見物客や参拝客の目を引き、幸成さえも見取れてしまう。
舞が激しさを増したと同時に桃色の紙吹雪が舞い上がり、一斉に拍手が鳴り響いた。
舞い散る紙吹雪の中で踊る沙耶那は非常に美しくて、まるで本当に桜の中で踊っているようだ。
拍手が鳴り響く中、沙耶那は優雅な舞いを踊り続けたのだった……

３－４：合流

靴がコンクリートを叩く音が二つ。
片方はスポーツシューズともう片方がハイヒールだ。
「助けてくれ！！誰か！！」
男は大声で叫びを求めるが、今日は祭りの日で路地裏の人通りは無い。
転びそうになりながら逃げる男は深淵の中に向かって逃げているようだ。
その後ろを追い掛けるハイヒールの女性はトンプソンＭ１９２８サブマシンガンの銃口を上に向けながら速足で追い掛ける。
Ｍ１９２８はギャング映画に必ずと言っていい程出てくるサブマシンガンで、シカゴマフィアに好んで使われ、独特の発射音から「シカゴタイプライター」や「シカゴピアノ」とも呼ばれていた銃だ。
「どこに逃げるのかしら？」
女は円形の５０発入りドラムマガジンを取り付けたシカゴタイプライターを構えると引き金を引いた。
その名の通り、タイプライターを叩いた時のような銃声と同時に逃げていた男は地面に倒れる。
シカゴタイプライターが使用する．４５ＡＣＰ弾は拳銃弾としては強力な部類に入り、それで足を撃たれれば転倒は必至。
男は転倒しながらも両手を交互に出して這うが、女の速さよりも遅く、逃げるのは不可能だ。
「誰か……」
血を右足の太股から滴らせ、力無く助けを求める男の足に、女はハイヒールを上げ、男の傷口に思い切り下ろした。
「ギャアアアアアア！！」
男の絶叫が轟くと、ハイヒールが傷に食い込み、男の悲鳴がさらに凄みを増す。

「すぐに気持ち良くなるわよ？激痛の後の快楽程、良いものは無いわ」
そう言うと、女は失禁した男の髪を掴み、持ち上げると首に噛み付いた。
飛び散る鮮血が路地裏と女の服を濡らし、男の目は白目を向く。
涎れをだらし無く口から垂らす男は小刻みに痙攣させると、その男は意識を霧散させていった……

舞いが終わり、三人は沙耶那の家に向かった。
昨日のうちに菜月が沙耶那と連絡を取り、舞踊が終わったら合流する手筈を整えていてくれたのだ。
本殿の裏手の一階建ての家に挨拶をして入った三人を迎え入れたのは白狐役をしていた沙耶那の母、望だった。
長い黒髪を後ろで束ねた美しい女性だ。
望は三人を見ると頬を緩ませる。
「菜月ちゃん、いらっしゃい。それと、失礼ながらこちらの方達は？」
「転校生の直江幸成君と神宮寺鳳寿さん」
「初めまして、沙耶那の母の望です。娘がお世話になってます」
望は深々と一礼し、幸成も慌てて一礼する。
「いえいえ！！自分の方が沙耶那さんにはお世話になってます」
幸成は頭を上げ、何気なく前を見るとむっちりとした二つの丘があった。
ゆったりとした着物が沙耶那に負けない大きな胸で窮屈となり、幸成は天井を見上げ、その場しのぎでごまかす。
その時、奥の方から沙耶那の声が聞こえ、沙耶那は顔を覗かせる。

「すいません。待ちましたか？」
「うぅん。待ってないよ」
菜月は笑顔を見せると、明るい赤の着物を着た沙耶那が出てくる。
大和撫子を体言するような彼女は男性なら思わず溜息を漏らすような美しさが有り、可憐だ。
「ところで沙耶那？」
「どうしたの、お母様？」
「誰が幸成君と付き合ってるの？」
その問い掛けに幸成と沙耶那が顔を紅潮させて口を開ける。
「お母様！！」
「あれ？もしかして誰も付き合ってないの？幸成君はイケメンだから皆狙ってるでしょ？」
「……別に」
「ナツも恋愛対象としてはみてないな～」
（露骨に傷付くな、その発言……まぁ、そりゃそうか）
幸成はばつが悪そうに頭を掻くと奥から男性が飛び出してくる。
「沙耶那が付き合ってるだと！？」
セミショートに白い着物を着た男性は日本刀を引き抜くと沙耶那と望の間に割って入り、幸成に刀を振り下ろした。
どうやら鬼の役をやった人物のようだ。
男性は左足を前にし、上段に構えた刀を斜めにした構え「左上段」で幸成まで、駆け寄る。
左上段で構えられた刀が振り下ろされ、空を斬る音が響き、刃が閃く。
慌てた幸成はその刃を眼前で受け止めると、男性は幸成を斬るべく切っ先近くの峰を押さえながら怒鳴る。
「娘を誑かしやがって！！」
「何の事だよ！？」
幸成は歯を食いしばり、その力に対抗する。
人生で初めて白刃取りを成功させたはいいが、後にも前にも引けな

いからにはどうしようもない。
驚いた菜月と鳳寿は玄関の壁に取り付き、助けは望めない。
「あなた！！真剣で切り掛かるのは止めて下さい！！」
真剣って普通に危ねぇじゃねぇか！？
望の声を聞き、条件反射で受け止めて良かったとつくづく思う。
刹那、男性は望に頭を叩かれて刀の柄から手を離して頭を押さえる。
「っつ～！！何をする、望！！天誅の邪魔をするな！！」
「あなたを天誅してやるわよ！」
望は腕を捲り、男らしく怒鳴ると、幸成を見て再び深々と頭を下げる。
「家の主人がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
幸成は真剣を地面に置くと深く嘆息を漏らし、白い刀身を一瞥する。
いくら回復力が高くても刀で頭をかち割られれば死んでいただろう。
流石に知り合いの家で、その父親に斬り捨てられるのは御免だ……
「こちらが夫の翼です。見ての通り親バカです……」
「ごめんなさい。怪我は無いですか？」
「あ、ああ……奇跡的に大丈夫……」
本当に奇跡的に……
「お父様も謝って下さい」
「笑えねぇ……娘に纏わり付く虫を払うのは父親の役割だろ？」
「「謝りなさい！！」」
沙耶那と望はまるで母親か姉のような口調で翼に怒鳴り、翼は面白くなさそうに口を尖らせる。
「……申し訳ありませんでした……一つ言っておく！！沙耶那を泣かしたり、付き合うようなら斬って捨てる！！」
胸を張って堂々と宣言する翼は再度頭を叩かれ、よろめく。
下手をすればヘクセよりもこの人に、勘違いで殺されかねないと幸成は苦笑する。
「では、行ってきます」
沙耶那が言うと両親はゆっくり頷き、手を振った。

その見送りを背に沙耶那の家を出た四人は広場の屋台に向かう。
楽しいはずの美少女との祭りだが、幸成はある意味で肩身が狭かった。
美少女三人と一緒にいる幸成に刺さる視線が痛い、痛すぎる。
（殺意すら感じるぞ、おい……）
幸成は紺色の髪を掻き上げると深い嘆息を漏らした。
「どうしたのですか？」
「いや、敵は一つだけじゃないって思ってさぁ」
沙耶那の問い掛けに幸成は苦笑いを浮かべ、三人は首を傾げる。
「そこのモテモテの兄ちゃん！！」
不意に肩を叩かれた幸成は条件反射で身構えるがそこには中年の男性が立っていた。
男性は煙草を口にくわえ、満面の笑みで近くの屋台を指差す。
「彼女達のプレゼントに射的でぬいぐるみを取らないかい、兄ちゃん？」
男性は射的の屋台の人らしい。
見ると可愛らしいぬいぐるみが並べられている。
「うわぁ！！可愛い！！」
「幸成君、お願い出来ますか？」
「はい。一回何円ですか？」
幸成は財布を開きながら男性に問い掛ける。
「弾が３発で３００円！６発で５００円だ」
「じゃあ、３発分で」
幸成は１００円玉を３枚取り出し、男性に手渡した。
「３発では取れないと思うよ、兄ちゃん？」
「やらなきゃ分かりませんよ」
幸成は笑って見せると射的台に立ち、射的用のおもちゃのライフルを掴む。
ボルトアクションを模したライフルのバネを後退させて、プラスチックの皿に乗せられたコンクをライフルの先端に詰める。

「それぞれ何のぬいぐるみがほしい？」
「ウサギのぬいぐるみをお願いします」と沙耶那。
「猫さん！」と菜月。
「……熊」と鳳寿。
ある意味それぞれ動物に例えたらそうなりそうだ。
「了解」
幸成はリアサイトの間にフロントサイトが見え、目標に銃口が重なるようにライフルを構える。
そして、ゆっくりと力まずに引き金を引くと、レバーが前身してコルクが発射された。
コルクはウサギの額に当たり、台から落とす。
シガレットやラムネ等は簡単だが、ぬいぐるみとなると倒すのは難しい。
幸成はそれをたった一発でやってのけたのだ。
男性もまさか一発で倒すとは思っていなかったらしく、唖然とし、口にくわえていた煙草を取り落とす。
「まずは一個目な？」
幸成はレバーを引きながらニッと笑い、コルクを詰める。
「次！！」
狙撃の要領と同じだ。
目標のバランスが悪い場所にコルクをピンポイントで叩き込んで倒す。
ましてやヘクセのような速く動く相手に拳銃を使うのと違い、全く動かないぬいぐるみを照準の固定がし易いライフルで狙うのは非常に簡単だ。
しかも幸成は射撃能力が高い自衛官に贈られる射撃徽章を持っている為、二メートルの距離の射的は造作も無い。
二つ目の猫も易々と倒した幸成は最後の熊のぬいぐるみに銃口を向ける。
そして案の定、簡単に熊のぬいぐるみを撃ち倒した幸成は悔しがる

男性からぬいぐるみを受け取り、三人に配る。
「ユキ君凄い！射的のプロ？」
「一応、初めてやった」
幸成は頭に手を当てて笑う。
「……ありがとう」
鳳寿は熊のぬいぐるみを満足げに見ながら呟く。
「幸成君は何をやらせても得意そうですね？何か苦手な物とかありますか？」
「苦手な物か……」
ロイの女癖の悪さとヘクセ、と答えられる訳もなく幸成は考え込む。
冷静に考えたら苦手な物はあまり無いかもしれない。
基本的に自衛隊の訓練は何とかなったし、炊事や洗濯等の家事も人並みに出来る。
「正直、思い当たらない……」
幸成は難しい顔で唸りながら答えると、沙耶那は「それは凄いですね」と笑いかけた。
と、同時に菜月は近くにあった金魚掬いに駆け寄る。
「皆で金魚掬いやろ！こうなったらユキ君の苦手分野を洗いざらい見つけ出してやる」
菜月は無邪気に笑うと、三人は金魚掬いの屋台に歩み寄った……

3―5：謎掛け

デジタル時計が17時のアラームを鳴らした。
任務の都合上、この時刻には切り上げなければならない。
腹が減っては戦は出来ぬとはよく言った物だ。
実際の所、任務の一時間前に夕食を食べ、尚且つ腹ごなしをしないと力を発揮出来ない。
つまり、偵察衛星が固定される19時の一時間前には帰る必要があるのだ……
「俺、そろそろ帰ります。血吸い人が恐いですし」
幸成は冗談混じりに笑うと鳳寿も「……アタシも」と呟く。
「じゃあ、今日はお開きにしましょうか」
沙耶那は優しく微笑むと、全員から貰った金魚を見ながら大きな声で言う。
「じゃあ、明日も皆で遊ぼう？せっかくの三連休なんだしね！！」
菜月はそう言うと、携帯電話を取り出した。
「連絡を取りやすいように皆の連絡先を交換しようよ」
正直、あまり連絡先を教えたくはないが、これを断る道理も無い。
皆がそれぞれ携帯電話を取り出し、幸成も折り畳み式の深い青色の携帯電話を取り出す。
一人ずつ赤外線でアドレスを交換していった……

望遠鏡の隣に散乱した潰れた多くのアルミ缶。
ロイは半ばふて腐れながらシガレットを口にくわえていた。
遠くから見れば髪を金髪に染めた不良少年が煙草を吸っているよう

にしか見えない。
「あ〜、畜生……何で幸成だけなんだろ？」
「少なくとも顔はいいよね？『顔』は……」
優はオレンジジュースを煽りながらつまらなそうにロイに八つ当たりをする。
その様子を面白そうに見ていた彩花は口を開く。
「今回は自業自得ですよねぇ？まぁ、仕方ありませんねぇ。だって彼は任務優先だからぁ、優の相手はしないと思いますしぃ、ロイももっと誠実にならないと彼女は無理ですよねぇ？」
「本当の事を言われると辛い……」
優は体育座りで隅に座るといじける。
子供かと突っ込みたいロイを見て、彩花は目を細めて問い掛けた。
「貴方は堪えてないんですねぇ？もしかしたらですけどぉ、実は女たらしは狂言でぇ、彼女なんて要らないとか思っているんじゃないですかぁ？」
彩花の一言にロイは目線を落とし、深い溜息をついて肩を竦めた。
「さぁて、どうかな？」
ロイは何でもないように笑うと近くにあった飲みかけの炭酸飲料を一気に飲み干し、缶を潰す。
「誰だって嘘を言う。だが、それが事実かどうかは本人にしか分からない。彩花さんの予想は正解でもあり、誤答でもある。これはいかに？」
ロイは謎掛けのような口調で答えると、彩花は「成る程、良く分かりました」と呟く。
「どういう事？ボクにはさっぱり分からないんだけど……」
「彼はしっかりヒントを言ってますよぉ？そして答えもでますから、ゆっくりと考えてみて下さいねぇ？」
彩花は首を傾げながら優に笑うとティーポットから紅茶を注ぐ。
紅茶はティーカップの半分程でティーポットから出るのを止めた。
「あらあらぁ？お茶が無くなってしまいましたねぇ？そろそろ切り

上げましょうかねぇ。時間も時間ですからぁ、幸成も帰って来ますからねぇ？」
「ヤバイ！！夕食の支度してないよぉ……」
優は頬に手を当てながらムンクの叫ぶ宜しく、絶望的に湿った声で呟く。
「幸成関連になると周りが見えなくなるな」
ロイは指を差しながらクックッと笑いを堪えながら言う。
優は憎らしげにロイを見ると立ち上がると、ロイを見下ろしながら口を開く。
「ロイには夕食を作ってやらないから！！」
「ちょっ！！それは無い！」
ロイは部屋を退出する優にすがり、彩花だけが夕日が注す部屋に残された。
冷めきった紅茶の匂いを堪能しながら彩花は小さく呟く。
「謎掛けの答えはぁ……誰だって嘘をつき、事実かどうかは本人にしか分からないんですよねぇ？つまり、自分でも分からないという事でぇ、正誤は無いという事ですよねぇ、ロイ？」
彩花はそう言うと紅茶を飲み干した。
（何が在ったんでしょうかねぇ、彼は……）
彩花は外を眺めながらティーカップを机に置き、声に出して笑った……

３－６：敵対者

幸成が帰宅してから約四時間経った。
青いＨＳＶの映像を眺めていたロイは不意に声を荒げた。
「ポイントＣ９ジュリエットにヘクセを確認！！」
その声に三人は画面を凝視した。
上空からの目が緑色に映し出すヘクセを捉え、その動きを監視する。
敵は広い路地裏を歩き回り、獲物を探しているようだ。
狭い路地裏だったから白狐を確認出来なかったが、今回は広い路地裏だったのがこのヘクセの運の尽き。
「現地への移動手段はどうする？」
ロイの問い掛けに幸成は立ち上がりながら「飛んで行くさ」と嘯く。
「指示は任せた」
「しかし、おっちゃんには連絡しなくていいのか？」
「臨機応変が常の部隊だ。仕方ないだろう」
幸成は黒の戦闘服に着替えながら答えるとホルスターに二丁拳銃を入れる。
「分かった」
「彩花さんはいざという時の医薬品の準備を、優さんは弾薬の補充の準備を頼む」
二人はゆっくりと頷くとすぐに準備に取り掛かった。
ＨＡＷＫにおいて作戦の指揮は階級ではなくエージェントの判断となる。
エージェントは作戦において現地に赴く為、彼の判断で各々の隊員に指示が下されるのだ。
「さてと、敵はシュトレイゴイカバールか、はたまたはぐれヘクセか……」
装備を整えた幸成はフックショット「ＨＡＷＫ－ＢＩＬＬドルヒボーレン」を構え、外に飛び出すと５０ｍ先の建物に放ち、移動を開

始した……

闇夜の中を駆けて行く白い影。
闇を切り裂くその影は長い髪に白狐の面を付け、左手には刀。
白狐は真っ直ぐ目標に向かって行った……

建物の屋上に降り立ってはドルヒボーレンで別の建物に跳びを繰り返して目的地に向かっていた。
不意にヘッドセット「ＨＡＷＫ－ＥＹＥ　フューラー」からロイの声が聞こえてくる。
（こちらスカイアイ。敵はポイントＣ９インディオにある廃工場に移動した、オーバー）
「ロメオ、了解。オーバー」
幸成は指定されたポイントの近くにあるビルに立つとフューラーをナイトビジョンに切り替える。
（敵は銃のような物を持っている。気をつけろ。スカイアイ、アウト）
ロイの無線が終わると同時に廃工場の窓にシカゴタイプライターを持った女性の後ろ姿が見えた。
女性は赤いハイヒールに赤いドレス、茶色のセミショートの出で立ちだ。
幸成はＨＵＤのナイトビジョンをＨＳＶに切り替える。

女性の色は緑、間違いない。
「こちらロメオ。何度も済まない。敵を確認した。武器はドラムマガジンのシカゴタイプライターだ、オーバー」
（Ｍ１９２８かぁ……鹵獲したいな）
優の声に幸成は「貧乏部隊には要らないだろ」と突っ込む。
シカゴタイプライターの使用する弾薬は・４５ＡＣＰ弾で、ＨＡＷＫの使用する装備は９ｍｍパラベラム弾を改造した９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾を使用する。
・４５をセンチ換算に直すと約１・１４ｃｍ。
つまり、９ｍｍＳＤ弾とは別に・４５ＡＣＰ弾を必要とし、貧乏まっしぐらという事だ。
「これより交戦する。シカゴタイプライターは取れるようなら取る。だが、期待はするなよ？ロメオ、アウト」
幸成はそう言うと、ＨＵＤを再びナイトビジョンに切り替え、左手にドルヒボーレン、右手にナイフ「ＨＡＷＫ－ＮＡＩＬ メッサードルヒ」を構え、窓の上にドルヒボーレンを撃ち込んだ。
体が一気に引っ張られ、凄まじい速度で窓に向かって行く。
窓にぶつかる直前でドルヒボーレンの先端を壁から引き抜き、足から突入するように態勢を整える。
凄まじい速度を窓を割る事で抑えた幸成はシカゴタイプライターを持ったヘクセの首元にナイフを突き立てるが、一瞬速く幸成に気付いた女ヘクセは横に移動してナイフを躱す。
勢いで地面に落ちた幸成は転がりながらも受け身を取りつつドルヒボーレンとメッサードルヒを仕舞い、スコトス＆フォースを中腰の姿勢で構える。
「あらあら、闇討ちですか？匹夫がやる所業ですね」
女はシカゴタイプライターを構えると幸成に不敵な笑みを見せる。
「紅い瞳にその異形の二丁拳銃……報告通り。私はミリア・サディール。貴方が追っているシュトレイゴイカバールのヘクセですよ」
俺達の存在がバレている！？

幸成は眉を潜めると白狐を思い出す。
やはりアレはシュトレイゴイカバールのヘクセか？
「ディックを殺して舞い上がっていたら貴方は死にます」
「何故だ？」
「あいつは単なる敵対者をおびき出す捨て駒にしか過ぎないのだから。尤も、貴方をおびき出す為ではなかったんだけど……」
姿を晒したのはこっちだったって訳だ……
抜かった！！
幸成は歯をギリと鳴らすと、左手の銃を構えながらＨＵＤでミリアを捕捉する。
「それにしても、私は貴方を殺す為に差し向けられたのですけど……貴方は美しい顔立ちをしているわ。きっと血も美味なんでしょうね」
ミリアがうっとりとした口調で呟くのを聞き、幸成は鼻で笑った。
「少なくとも飲めないと思うぜ？」
「何故？」
「俺がお前の頭を破壊してお前は口無しになるからな！！Ｃｏｍｅ ａｎｄ ｇｅｔ ｍｅ（捕まえてみやがれ）！！」
幸成は怒鳴ると二人は同時に引き金を引いた。
窓からは蛾が中に入り、その窓からシカゴタイプライターの銃声が小さく漏れるのだった……

3―7：跳弾

響き渡った銃声。
響き渡ると言っても微かで殆ど聞こえなかった。
しかし、白狐は歩みを止めると周囲を見渡す。
そしてすぐに銃声のした方向に駆けて行った……

最初の射撃は共に足元の地面に直撃し、弾痕を残す。
幸成は壊れた機械に、ミリアは柱の後ろに隠れる。
（遠距離特化か……どう仕留める？）
幸成はスコトス＆フォースを構えながら舌打ちをする。
実際の所、拳銃（ハンドガン）と短機関銃（サブマシンガン）では分が悪い。
スコトス＆フォースをフルオートが使えるが、下手に乱射すれば弾の無駄になる。
「どうしたの？かくれんぼのつもり？」
ミリアの声とハイヒールが地面を叩く音が響き渡る。
柱から出たのが運の尽き、と言いたいが下手に場所を露見させる訳にもいかない。
幸成はスコトスのマウントレールにＨＵＤに連動する小型のカメラを取り付けた。
カメラはＨＵＤに随時映像を送り、壁越しからの射撃を助ける物だ。
生憎、一つしかないのが痛い。
幸成は機械から腕だけを出して拳銃を水平にゆっくりと動かす。
しかし、ミリアらしき影は確認出来ない。
幸成が眉を潜めたその時、スコトスから送られてくる映像が途絶え、

凄まじい衝撃が掌に伝わる。
拳銃は弾け飛び、幸成の足元に転がった。
「見ぃつけたぁ」
上から聞こえてきた声にハッとした幸成は梁を見上げる。
そこにはシカゴタイプライターの銃口を向けてほくそ笑むミリアの姿があった。
幸成はスコトスを蹴り上げながら柱の影に走るとシカゴタイプライターから．４５ＡＣＰ弾が吐き出され、地面を刈る。
間一髪、柱の後ろに駆け込んだ幸成は舌打ちをした。
梁の上は柱以外の遮蔽物である機械を全てマーク出来る。
同時にこちらが何処に隠れているかさえ分かってしまう。
武器はおろか、地の利も奴にある。
「いつまで隠れてるつもり？」
ミリアは幸成の近くにあった機械に向かって一射した。
刹那、．４５ＡＣＰ弾は機械の曲がった部分を利用して弾道を変えて、幸成の正面の壁に反射、幸成の頬に傷を作る。
「跳弾か！」
通常、室内戦においてライフルではなくサブマシンガンやハンドガンを使うのは跳弾を避けるためだ。
室内で使われる弾丸はライフリングの影響で貫通しなかった場合は殆ど跳弾になる。
その為、跳弾防止に射程が短く、威力の低い拳銃弾を使用したサブマシンガンが使われるのが主流だ。
しかし、サブマシンガンでも跳弾が起きるのもまた事実。
跳弾で変形した弾丸は形が異質に変形する為、腕でも致命傷に成り兼ねない。
ほんの数ミリの差で致命傷を免れたが、敵は狙って跳弾を撃ってきた。
と、言うことは遮蔽物は意味など無い。
幸成は思い切って飛び出すと二丁拳銃をフルオートで撃ち込む。

ミリアは梁から飛び降りながらシカゴタイプライターを乱射し、幸成は走る事で弾丸を避ける。
サブマシンガンに地の利で勝つ方法はただ一つだ。
幸成は機械の後ろに飛び込み、弾倉を交換した直後無数の跳弾が幸成を襲う。
腕や足を掠める弾丸に舌打ちをすると、幸成は二丁拳銃の薬室に弾丸を送る。
チャンスは一瞬。
奴が弾倉を交換する瞬間だ。
シカゴタイプライターのドラムマガジンは大量に弾丸が装填されているが故の欠点もある。
跳弾が止み、頬から血が滴り落ちてきたと同時に幸成は一気にミリアに駆け出した。
案の定、ミリアはドラムマガジンを交換している。
地の利を得るチャンス、それは接近戦だ。
ハンドガンは弾倉を差し込んだらスライド・ストップを押し下げて装填すればいいが、サブマシンガンはそうはいかない。
弾倉を交換し、初弾を装填するにはコッキングレバーを引かなければ成らず必然的に装填に時間がかかる。
しかも旧式のサブマシンガンであるシカゴタイプライターは約５．２ｋｇと重く、近距離戦では取り回しが難しい。
さらにドラムマガジンに加え、５０発の．４５ＡＣＰ弾により５８０ｇも重くなっている。
装填の隙に接近して、弾丸によって重くなった取り回しの悪いシカゴタイプライターの苦手な接近戦に持ち込み、接射で片付けるのが幸成の狙いだ。
幸成はフォースで牽制しながら接近し、ミリアの周りに近付く。
ミリアは慌てて幸成に銃口を向けるが、幸成はミリアの死角に回り込む。
虚しくシカゴタイプライターの銃声とマズルフラッシュを閃かせた

ミリアの背後に回り込んだ幸成はフォースの残った弾丸とスコトスの弾丸を有りったけミリアに叩き込んだ。
多数の弾丸がミリアの体を撃ち貫き、ミリアを弾くが、倒すまでには至らなかった。
「クソ！やり損ねた！！」
幸成は距離を離されたミリアを見て舌打ちをした。
ミリアも体に開けられた傷から血を流し、憤怒の表情で幸成を睨む。
「計画変更よ！！殺してあげる」
ミリアは口から出る血を舐め取るとシカゴタイプライターの銃口を向ける。
その時だった。
幸成が突入した窓から白い影が飛び込んだ。
緋色があせたような色である緋褪(ひさめ)色の刀が月光で反射する。
ミリアは反射的にその影を向くと白い影はシカゴタイプライターの銃身を真っ二つにした。
「鉄をも切り裂く」とは良く言うが、実際にそれを見せられると思わず恐怖する。
白狐は続けてミリアの体を斜めに斬った。
臓物をばらまき、死に絶えるミリア。
ヘクセが死ぬ時に起こる細胞自殺によってミリアが溶ける。
刹那、白狐は幸成にも緋褪色の刀の切っ先を向けたのだった……

3－8：狼と狐

（こちらロメオ。スカイアイ、聞こえるか？オーバー）
幸成の声にロイはヘッドセットに耳を当てながら「聞こえる、オーバー」と答える。
（ヘクセと交戦中に白狐が出現した。オーバー）
「何だと！？映像を送れ！」
数秒して幸成のＨＵＤからパソコンに送られてきたのは、ナイトビジョンで捉えられた緋褪色の刀身の刀を突き付ける白狐の姿だった。
白狐は白い着物にその名の通り白い狐の面を付けた髪の長い人物だ。
「これか？お前が見たのは？」
（間違いない。コイツだ）

「間違いない。コイツだ」
幸成はヘッドセットを押さえながら、白狐に聞こえないように小声で吹き込む。
ヘクセか、コイツ？
幸成はＨＳＶを起動させると言葉を失った。
反応はオレンジ、つまり人間。
シュトレイゴイカバールのヘクセを殺し、こちらに敵意を向けている白狐が人間となれば、先程ミリアが述べた「敵対者」なのだろう。
しかし、シュトレイゴイカバールが囮を使ってまで敵対者である白狐をおびき出すという事は相当の手練れだ。
しかも人間となれば幸成と同じ存在か？
幸成が思考を巡らせていると白狐が刀を右脇に取り、切っ先を下に

構える「脇構え」で対峙する。
人間と分かった以上、実弾で相手にする訳にはいかず、麻酔銃「グロック２６－ＨＡＷＫ　ミューデトラウム」を右手に構えた。
ドイツ語で「眠い夢」を意味するミューデトラウムは世界初の対人麻酔銃だ。
あらゆるメディアで対人麻酔銃なる物が存在するが、現実にそんな物は存在しない。
麻酔は分量を間違えたら死に至る。
さらに薬品の方が弾薬よりも高額になり、実用的ではないからだ。
しかし、このミューデトラウムは優と彩花の二人の天才によって実用化に成功した。
弾薬は９ｍｍパラベラム弾を改造したものだが、弾頭部が蚊の針のように小さい。
弾丸が貫通しないように火薬も少なめに調整されている。
特筆すべきは使用されている薬品だ。
筋弛緩剤の「サクシニルコリン」の成分に似た新型麻酔薬を採用し、致死量に至る直前に致死量分の薬が麻酔と反応した血液に分解されるようになっている。
さらに開発者が彩花の為、資金等は安い。
欠点は火薬が少ない為、シャルデンプファー仕様にすると弾頭が発射されない事で、銃本体にサプレッサーが使われる事だ。
幸成は左手でドルヒボーレンを逆手に持つと白狐をＨＵＤに捉えた。
刹那、白狐が駆け寄ってくる。
幸成はミューデトラウムを構えて引き金を引くが、白狐は機械を蹴って飛び上がる事で麻酔弾を避け、そのまま幸成に刀を振り下ろす。
彼が即座に離れた瞬間、幸成が隠れていた機械が真っ二つに切れた。
その鮮やかな様子ではメッサードルヒで受けるのは無謀らしい。
幸成は舌打ちをするとメッサードルヒを鞘に仕舞い、ミューデトラウムだけを構える。
しかし、白狐は幸成に反撃の隙を与えないとばかりに激しい攻撃で

幸成を壁に追い詰めた。
が、幸成も壁を蹴って白狐の後ろに回り込むとミューデトラウムの引き金を引く。
同時に白狐は振り返りながら刀の鎬でそれを弾いた。
弾丸が刀に当たって火花を散らし、ナイトビジョンが無ければ何も見えない闇を一瞬だけ照らす。
恐らく敵はこちらのＨＵＤの光で攻撃を仕掛けている。
かと言ってＨＵＤを切ってしまうとただでさえ速い斬撃を暗闇の中、手探りで避けるしかなくなってしまう。
成る程、シュトレイゴイカバールがわざわざ倒す為の手回しをする訳だ。
幸成が思考を巡らせていると刀が斜めに振り下ろされ、幸成の左手の静脈を切り裂く。
左手からはどす黒い血が流れた。
鋭い痛みと静脈を切られた事で左手が使い物に成らなず、回復力が高いと言っても深い傷ならすぐには治らない。
幸成は右手だけでミューデトラウムを構える。
（畜生！！ヘクセ並だぞ、コイツ……）
スコトス＆フォースなら同時二連射による計四発の弾丸で弾幕を張れる。
ましてや、フルオートならその軽機関銃並の弾幕により瞬殺が出来るのだが……
相手が人間となれば非正規部隊と言えども対ヘクセの部隊である為、たとえ敵対している一般人であっても傷付ければ処分される。
片手両足を縛った戦いとはベトナム戦争期の米軍人の言葉であるが、今がまさにその状態だ。
白狐はバッティングフォームに似た構えである八双の構えをしながら距離を詰める。
幸成が一歩退いたその時、白狐が切り掛かってきた。
八双の構えから剣道の技で言う右の脇腹に胴を叩き込む「逆胴」へ

の移行速度は速い。
幸成はＨＵＤのＬＡＶの機能ですら捉えられなかった逆胴でボディアーマーごと腹部に切り傷を負わされる。
多少距離が離れていたから良かったものの、まともに当たれば上半身と下半身が離れて妖怪「テケテケ」状態だった。
（冗談抜きで笑えねぇ……）
幸成は苦笑いを浮かべたその時、逆胴の反動を利用しながら一回転をし、幸成の頭に刀を振り下ろす。
横に回避した幸成の立っていた地面が刋れ、コンクリートが空中に舞い上がる。
幸成の額に弾け飛んだコンクリート片が当たり、傷を付けた。
防戦一方の状態となるが、幸成は負けじとミューデトラウムの引き金を引く。
が、やはり刀で容易に防がれる。
もはや、人間かすら怪しい挙動だ。
幸成が震える左手でミューデトラウムの弾倉を交換する。
刹那、白狐は刀を幸成の頭上に振り上げた。
幸成は反射的にミューデトラウムを投げ捨てると白狐の振るった緋褪色の刀の刃を両手で受け止める。
白刃取り……
まさか一日で二回もやるとはと幸成は自嘲するが笑っていられる状態ではない。
斬られた部分からは血が滴り、跳弾と刀で付いた傷が疼く。
刃を押さえている左手からは血が垂れ、地面を濡らした。
白狐は刀の鞘を押さえ、幸成を切り裂こうとする。
掌が刀で少しずつだが削られ、緋褪色の刃を血が伝う。
窓から零れ出る月明かりが二人を照らし、幸成の顔と白狐の面を照らした。
その時、白狐は力を緩めると幸成から離れる。
まるで何かに驚いたように……

幸成は怪訝な表情で白狐を見ると、白狐は慌てて入って来た窓から飛び出して行く。

「何なんだ……畜生……」

幸成は小声で呟くと多量の出血で出来た水溜まりに倒れ、気を失った……

4－1：病室

柔らかいベッド。
いつもの煎餅布団とは違う柔らかなベッドだが馴れ親しんだ匂いとは違う、消毒液と漂白剤の混ざった匂いだ。
喉が渇いた……
乾き過ぎて不快だ……
幸成は体を起こそうとしたその時、体中の激痛に呻き声を上げた。
「……ってぇ……」
「よぉ、起きたか」
激痛に呻いた幸成の横で聞こえてきたロイが笑みを見せた。
「ここは？」
「病院だ。ひでぇ様だな？ここまでやられたのは初めてだな」
「悪い……」
疼く傷に耐えながら幸成は謝った。
良く見れば体にはソルタＴ３号、またはリンゲル液３号と呼ばれる輸液の袋が点滴の針で繋がっている。
「お前がやられるって、白狐はどんだけ強いヘクセだったんだ？」
「ヘクセじゃない……人間だ」
「人間ねぇ……人間！？」
「ヘクセみたいに速くて強い……ハッキリ言って麻酔銃じゃ無力化出来なかった……」
幸成は天井を見上げながら小さく呟く。
ヘクセという存在に苦戦しても人間にここまでやられたのは初めてだ。
悔しさよりも驚きの方が大きく、幸成は疼く両掌を握る。
あの身体能力は人間に有り得るのか？
「はいはぃ？目覚めましたねぇ？幸成の戦闘を解析してぇ、一つの仮説にたどり着いたのでぇ、報告に来ましたよぉ？」

不意に入って来た彩花の声に幸成とロイが注目する。
「仮説ですか？」
「白狐はぁ、潜在能力を自由に外せる人間と考えられますぅ」
「潜在能力？」
「潜在能力とはぁ、一般的に火事場の馬鹿力と呼ばれていますぅ」
こうも一般的な名前で言われると呆気に取られて、言葉も出ない。
しかし、言っても聞いたのはこちらなのだが……
その様子を察した彩花は口を尖らせ、つまらなそうに呟く。
「火事場の馬鹿力を嘗めてるんじゃないですかぁ？火事場の馬鹿力は人間の可能性を高める最高の研究材料ですよぉ？」
その一言に幸成は「聞きますか」と呟き、疼く体に鞭打って体を起こす。
「そもそも人間の体はぁ、過剰な筋出力を出した場合に自壊してしまいますぅ。その為、平時は脳が自壊を起こさないようにリミッターをかけていますねぇ？」
「「ねぇ？って言われても知らねぇよ」」
幸成とロイは苦笑いを浮かべて顔を見合わせる。
その様子を見ていた彩花は深い溜息を漏らし、椅子に座って足を組む。
色っぽい大人の色香にロイならず幸成も心の臓が高鳴ってしまう。
その様子を見て頬を緩ませた彩花は続ける。
「恐らく白狐はそのリミッターを外す訓練か何かを受けて任意で身体能力を向上させる事が出来るのでしょうねぇ？」
「そんな事が有り得るのかよ？」
「とにかく現状ではその説が一番可能性がありますぅ。しかし、白狐の正体が分かりませんねぇ」
それに二人も同調する。
白狐の正体が分からないのが異常だ。
肩まで掛かる髪の長さから男性とは考えにくい。
だが、胸が普通の女性よりも無い為、女性の可能性も低い。

幸成は顎に手を当てて考えているとメールの着信音が病室に鳴り響いた。
「あらあらぁ？彼女さん達からですかぁ？」
「彼女じゃねぇよ」
幸成は目を細めて口を尖らせると指だけで携帯電話を支えて、開いた。
着信には沙耶那の名前が踊っている。
幸成は暗証番号を入力してメールを開くと可愛い絵文字がふんだんに使われた、幸成を心配する内容のメールであった。
簡単に説明すると幸成が階段から落ちた事を心配する内容だ。
「……俺、階段から落ちたのかよ？」
幸成は苦笑いを浮かべ、携帯電話から目線を外すと彩花が満面の笑みで微笑んだ。
「何かぁ、幸成はドジキャラで定着させたかったんですよぉ。ウチのこだわりって奴ですねぇ？」
何だ、このよく分からないこだわりは？
不意に新たな着信音が鳴り響いた。
今度は菜月だ。
菜月は今から沙耶那とお見舞いに行ってもいいかとのメールだった。
「この色男が！！畜生、出血多量で爆発しやがれ！！」
「何の話だよ？」
幸成は溜息を漏らすとロイと彩花が椅子から立ち上がった。
「お邪魔しちゃいけないのでぇ、ウチ達はおいとましますねぇ」
「そういう訳だ。明日には退院出来るだろうからその時に来るわ」
ロイはそう言うと手荷物を纏めだす。
二人の口調から沙耶那と菜月を呼べと言わんばかりの口調だ。
二人が退出したのを見送った幸成は疼く手で携帯電話に返信を打ち込むのだった……

4―2：動揺

傷もおおよそ塞がり、痛みも引いてきたがしばらく跡は残るだろう。
今回の白狐襲来には煮え湯を飲まされたが、次は何とか沈める必要がある。
今後の任務も奴に邪魔されるとなれば、最悪、実弾で沈める可能性も出て来るからだ。
人に対ヘクセ用武器を向けたくないというのが幸成の本音だったが、甘えた事を言ってられない。
幸成が嘆息を付いたその時、病室の扉が開き、元気な声が聞こえてきた。
「ユキ君、来たよ～」
「大丈夫ですか？」
元気な菜月と心配する沙耶那が病室に入り、頭に包帯を巻いた幸成が微笑みで答える。
沙耶那は額に包帯を巻き、両腕にも包帯が巻かれている幸成を見て、言葉を失った。
「階段から落ちて……このように……なったのですか？」
「ええ、まぁ……」
幸成が頭を掻くと沙耶那は顔を青ざめながら問い掛ける。
「何処を傷付けたのですか？」
「両掌と左腕、左脇腹が酷かったかな？」
その声を聞いた沙耶那はさらに顔を青ざめさせていく。
まるで化け物と出会った人のように恐怖で顔を歪めさせる。
「どうしたんですか？」
幸成が問い掛けると沙耶那は一歩後退り、ゆっくりと首を振った。
「何でもないです……私、急用を思い出しました」
「えっ！？サヤ、何も無いって言ってなかった？」
「その……ごめんなさい！！」

沙耶那はそう言うと、幸成の病室から飛び出していった。
何かに脅えるようなその表情に二人は首を傾げる。
「ユキ君、何かやったの？例えばセクハラとか？」
「ロイじゃあるまいし……」
「そうだよね、ユキ君は変態さんじゃなくてドジさんだよね」
……ドジキャラに定着してたよ、彩花さん……
幸成はげんなりとしていると窓の外に目をやる。
俺の仮説が正しければ、白狐への勝機が見えた！
幸成は拳をきつく握りしめると包帯を解き、菜月に笑いかけた……

その頃の雫荘は三村の帰宅で賑わっていた。
要約すると上は今回の事態は感知しないが、もし必要ならば手を回すという事だ。
つまり、５０万円の範囲で好きな装備を整えろという通達だった。
「やりぃー！！」
優は跳び上がりながらガッツポーズをすると、彩花も嬉しそうな表情で紅茶を啜る。
「どう分配するんですかぁ？」
「優には３０万と彩花には２０万でいいだろうな」
「あっ……俺と幸成が忘れられてる……」
胡座で座りながら壁に寄り掛かっていたロイが小さく呟くが三村は「お前にはもうおもちゃが有るだろ？」と笑う。
「じゃあ、おっちゃん！！キャリコＭ９００が二丁とヘリコプターのラジコンを二つ頼む！」
優は父親に服や靴をねだる娘のように自動小銃（短機関銃？）とヘリコプターのラジコンをねだる。

年頃の女の子らしからぬ頼み事に三村は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。
しかし、ラジコンは何に使うんだ？
「私はぁ、オオスズメバチを大量にお願いしますねぇ」
「……それこそ何に使うんだ……？」
気に入らない相手の部屋にスズメバチでも仕込んで完全犯罪でも謀っているのか、と三村は訝しげに彩花を見るが下手に突っ込むと自分がその対象に成り兼ねない為黙っていた。
「これで戦力の増強は問題無いな……ラジコンとスズメバチとは別として……」
「何か言いましたぁ？」
「いや、何も言ってない」
三村は否定すると時計を見ながら口を開く。
「幸成の所に行ってくるかな。任務の事はメールじゃ駄目だからな」
「今は止めた方がいいぜ、おっちゃん」
「どうした、ロイ？」
「幸成の所にこの前来たあの女の子達が、ね？」
「ほほぅ？幸成にモテ期到来か？結構結構！」
三村は大きな声で笑うと何気なく外を眺めた。
その時、道路を慌てて駆けて行く沙耶那の姿を見付けて眉を潜める。
ロイがさっき幸成の所に沙耶那と菜月が行ったと言ったばかりだが……
三村は窓を開けるとそこから顔を出した。
「沙耶那さん、だったよね？どうしたの、そんなに慌てて……」
三村の声に気付いた沙耶那は体をビクリと動かし、窓に目をやった。
「三村……さん？」
沙耶那は顔を青ざめさせながら、涙を溢れさせていた。
目は真っ赤に腫れて痛々しい。
「どうした？幸成に酷い事言われたか？あの野郎……こんな可愛い女の子を泣かせるたぁ、いい度胸だ！！」

「違う……違うんです！」
沙耶那は顔を手で覆い、泣き崩れた。
掌から溢れ出た涙がアスファルトを濡らし、沙耶那は嗚咽を漏らす。
何が何だか分からないその状況に三村は頭を掻くと明後日の方向を見る。
「すいません……今日は……」
沙耶那はそう言うと神社の方角に駆けて行く。
もはや、訳が分からないを通り越して拍子抜けした三村は空を仰ぎ見て深い嘆息を漏らした……

4―3：悪夢

暗い路地裏……
周りの壁も足元の地面も赤、紅、朱……
空が紫紺色に染まり、何も照らさない……
足元に転がる肉片はつい数分までは動いていた人間と呼ばれる肉の塊……

動いていても動いていなくても肉は肉……
それ以上でもそれ以下でもない……
死ねばそれまでだ……
肉に成る下がる……
血に濡れた体は鉄臭く……
目の前が深紅に染まり……
止まらない……
理性が止まれと叫んでも体が言うことを聞かない……
銀髪の髪が深紅の視界で揺れる……
駄目だ……
止まれ……
止まってくれ！！

「……っはぁ……はぁ……はぁ……」
幸成は白い病室のベッドから起き上がると紺色の髪を掻き上げる。
毎回、痛手を負った時に見る悪夢に幸成は舌打ちをした。
悪夢というよりは過去と言った方がいいだろう。

忘れたい過去……
二度と思い出したくない過去だ。
これが俺の罪なのか……
幸成は嘆息を漏らすと枕の上に頭を落とした……

私は、罪を犯した……
友人を殺しかけた……
でも、何故あの場に幸成君が？
まさか幸成君が血吸い人なの？

ＧＡＲＵＤＡが上空に固定されてから三時間経った頃、監視していたロイが声をあげた。
「ヘクセ確認！！」
ロイの怒鳴り声にコーヒーを飲んでいた三村が笑う。
「ここはヘクセの宝庫だな。はぐれヘクセの時の捜索とは大違いだ」
「コイツ、どうします？幸成がいないからスルーしますか？」
「今から彩花と優を連れて幸成を連行する」
「連行って……まぁ、そこはどうでもいいとして、白狐はどうする？下手をすりゃ奴も現れるだろう？」
その声に沈黙が流れる。
が、三村は鼻で笑うと立ち上がった。
「幸成なら何とかやるさ。ところで優、お前に預けていたアレは調

整終わっているか？」
三村の問い掛けに優は頷き、部屋の隅に置いていた大きめのアタッシュケースを持ってきた。
黒塗りのアタッシュケースを机の上に置くと鍵を開ける。
そのアタッシュケースにはカービンライフルとして最も有名とも言える「Ｍ４Ａ１」とその他アクセサリーが入れられていた。
「何で貧乏部隊がそんなもん持ってんだ？」
ロイの問い掛けに三村はニッと笑う。
「特戦時代からの相棒だ」
三村はそう言うと、Ｍ４Ａ１のグリップを握り、銃床を肩に付ける。
特戦ーーー特殊作戦群は陸上自衛隊に所属している陸自初の、公式の唯一の特殊部隊だ。
対テロ及び対ゲリラ作戦が主な任務であり、非公式ながらＨＡＷＫが創設されるまでヘクセと戦っていたが、ある人物との接触と同時に特殊作戦群が壊滅した。
現在は再編成をしている最中だ。
また、特殊作戦群が使用する武器は陸自正式採用銃の「８９式小銃」の他にこの米軍でも使われている「Ｍ４Ａ１」も使用されている。
そのＭ４Ａ１を構えると三村は安全装置を外し、弾丸が入っていない銃の引き金を引く。
「最初からそれを使えよ。何でわざわざ拳銃だよ」
「馬鹿野郎、ヘクセ相手に５．５６ｍｍ弾で勝てると本気で思ってるのか？」
「ん？違うのか？拳銃弾でも倒せてるんだし……」
「馬鹿だなぁ。今まではあの銃の特性があるからこそ勝ててたんだぞ？」
「無い胸を張るな！」
ロイが優に毒づくと優は「煩い、煩い！」と喚き散らす。
そんな優の額に三村はデコピンを喰らわせると「お前が煩い」と諌める。

「と～に～か～く～！！簡単に説明すると初弾が体に突入し、次弾が速度を落とした初弾に当たった衝撃で神経にダメージを与える。さらに次弾が初弾にぶつかった事で跳弾となり、体の中で暴れる。普通の人間だったら即死だからヘクセにもダメージを与えられるんだ。分かる？」

「何と無く……」

「言っちまえば、ライフルで倒したければ頭をフルオートで吹っ飛ばすしかねぇってこった」

三村はそう言いながら北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）標準規格の弾丸「５．５６×４５ＮＡＴＯ弾」を弾倉に挿入していく。

「それにあくまで支給されるのは９ｍｍパラベラム弾、５．５６ｍｍ弾なんて支給されねぇから、自腹で取り寄せなきゃならんからな。コイツもこの９０発の弾丸と２発のグレネードと１５発のショットシェルが無くなったら鉄の棒だからな」

三村はＭ４Ａ１のアクセサリーウェポンのグレネードランチャー「コルト　Ｍ２０３」とショットガン「ＸＭ２６　ＬＳＳ」を一瞥する。

様々なアクセサリーの中からフォアグリップとＡＣＯＧスコープ、ナイトビジョンのみに見えるレーザーサイト、そしてサプレッサーを装着した三村は暗視装置「ＪＧＶＳ－Ｖ８」を掴んだ。

「あくまで自分は三つ巴の乱戦になった時だけに出る。弾を無駄遣いしたくないからな」

「白状ですねぇ」

「当然だ。自分は奴を信用しているからな。さ、出掛けだ」

三村はベルトに二本の弾倉を捩込むと、もう一本を銃に装填する。

そして肩にＭ４Ａ１を肩に担ぎ、ＪＧＶＳ－Ｖ８を掴むとドアを開けるのだった……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6280x/

赤眼の狼

2011年11月7日08時11分発行